

懷  
硯

西  
鶴  
作

全  
五  
冊

天



養正十六年

詞林

詞林

雨乃東草店あめの申まをれまもも 諸しよもも ぬぬららぬ  
 名な詞し也や 亦またくく乃のいついつるる ありあり ぬぬららぬぬ  
 海うみもも 縁縁もも 師し道道ああれれと 我われ約やくくくわわんんちち  
 乃のああららううくくままををままののままくくゆゆららぬぬののああらら  
 多たくくををままををああそそむむくくいいそそのの信しん風ふうををまま  
 小こままををままををああそそむむくくいいそそのの信しん風ふうををまま  
 親かああももつつげげいいひひ 諸しよもも ぬぬららぬぬ  
 名な詞し也や 亦またくく乃のいついつるる ありあり ぬぬららぬぬ  
 乃のああららううくくままををままののままくくゆゆららぬぬののああらら

詞林

養正十六年

けふ或はむそりく或はわく或はふ  
こゆらんのかささきさきさき  
縁きぬらんあそむ

貞享四年花見月物旬

今更

懐祝熱目錄

卷一

二王門乃總

照を夜多舟の中

長柄よの内かぬる報

案の案のてむしれ夜不

くのたむ夜夜の山

明て悔き鬼の巻入のり

おまてきうぬあさるのり

向きの雁村ををり

一夜よかり男のり

おたふ身代り

卷二

後家ノ威ぞこゝろ

付孝子也合志痛

比屋元ノ事用此力

教乃もふはよふ人

桂ハ生来の子足

乃約ハ好基不好入

一足飛乃地獄海船

氏士ハ事理の如

現をたれく定居

教乃お家ノ威

卷三

水浴之渡川

竜蛇ノ夢乃光

一度よ又人女房去

見別ハ西彩の海

氣色の森乃傍

枕ハ流るあけ

誰ハ何ぞ思

統指生根の

二月終堂乃

決行計

卷四

大盗人入

夏月を

文字守

人志

乃乃隠

れ母

むとび

子ゆ

見よ地獄極楽

は神の極楽命極楽の

巻五

付の似せられた

世の心念をうら

明て梅と香子の海

花のぬきかたり

辰食もまますまの

心乃ち所嗜の

織物屋の今中おれ

力乃神のその

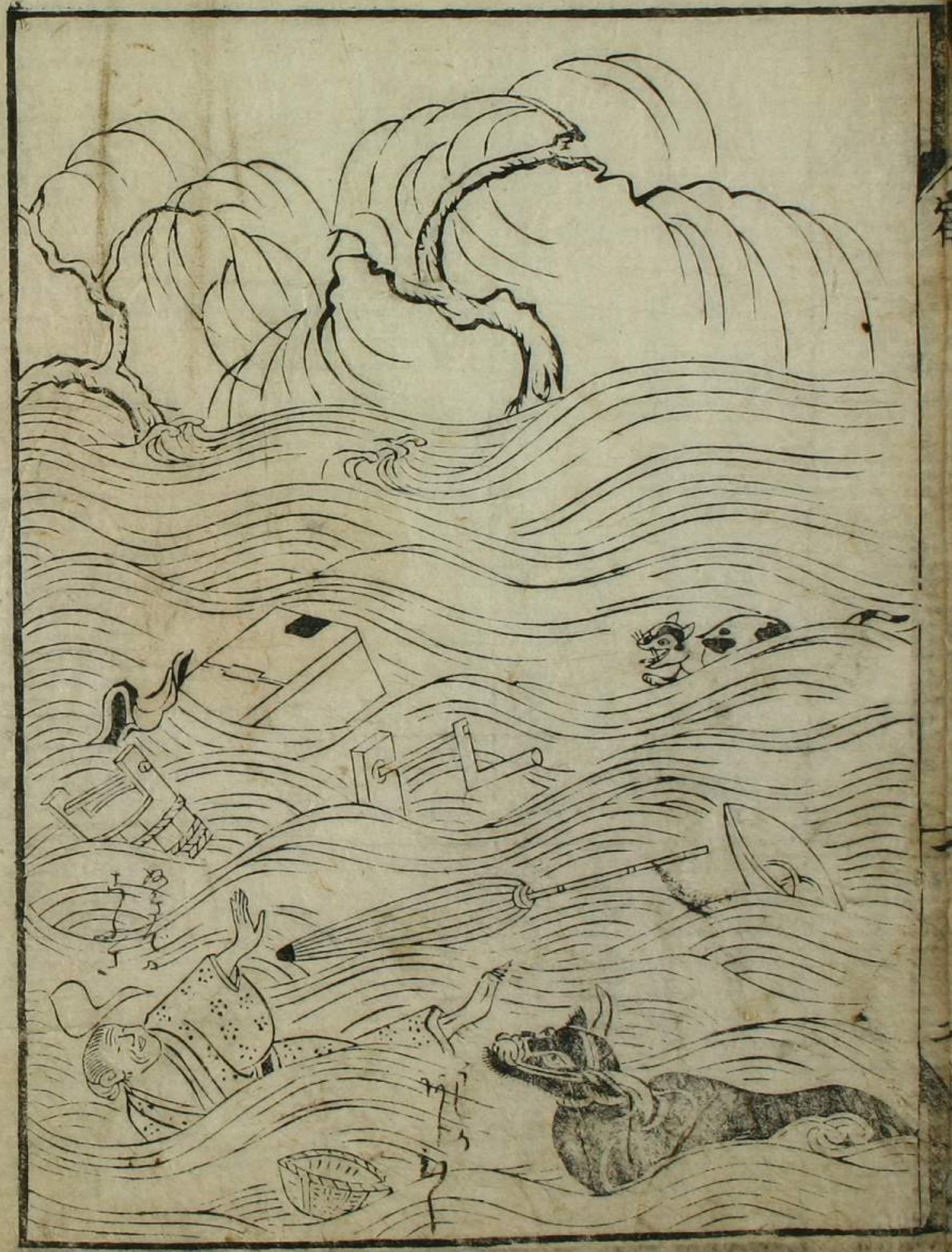
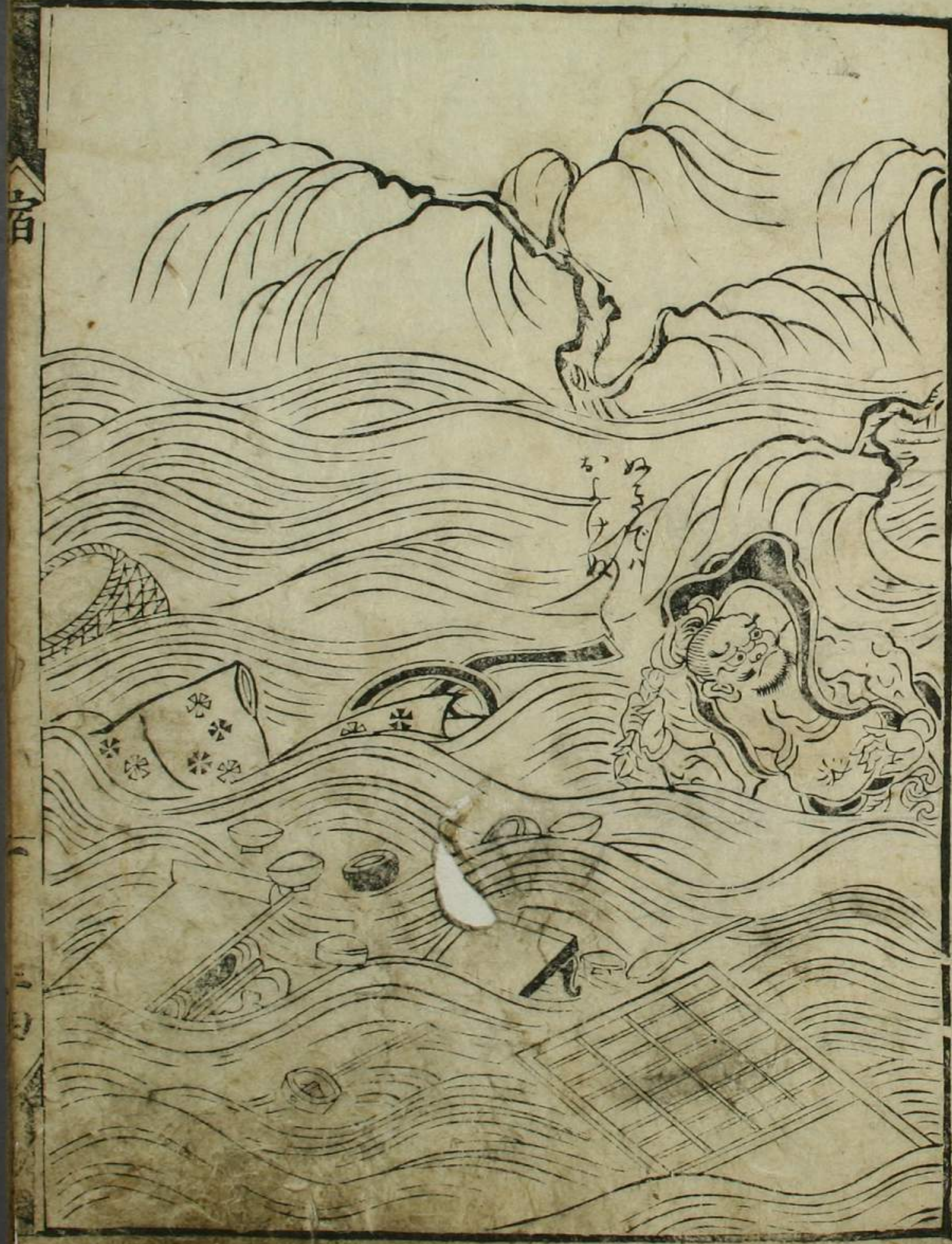
海代れうらひ

社う友金の

二五二乃總

新良の金下れらるる我らのよさうらぬ目を見て  
をいそぎに竹玉と宿とさうあぐらにの月の果實を  
やとせりひ菟より修のよおぬの世乃人こころの  
本乃毛の終さう人月がらすまてを國よの  
れつるのよありののよおぬのの終さうやと終現  
の海ひらうらな葉の山さうく月さうらひそれるあ  
とそさうらとせりらりきまは神乃信和の山さう  
乃かたりよ國老と極めひらりひむすどぬ極の香  
列の香人く國の香と極めとて極切とや極を夜  
の神と子細りくぬの山とととと信あもあは  
信あもと朝言本真鳴りく有る乃極信か





ももはぬ先は横ひをさうのこも是代代のこり  
あれもみせくぬれと所四してさうきんこ  
へ命をとらねとせ世小のをおとひてみま  
りさう人のお後さうぬを別別体よりさ  
いふんやうして是をさうさうはも十人さ  
きりあや房よいさうひのさうさう操さ  
きりあや房よいさうひのさうさう操さ  
大直と操中一丁もあり操あさり又船あひく  
ふりさうけ月あさりあさう是をさうとひめ  
くは今もおらうあさう世のんさうは夜もな  
まさんる時も今さうさうさうさうさう  
よ牙をさうあさう燭さうさうさう入是あさう

あり益をわけつとさうれむおのく月と月を  
ん合せさうさうさうさうさうさうさう  
ゆさうさうさうさうさうさうさうさう  
うさうさうさうさうさうさうさうさう  
惚さうさうさうさうさうさうさうさう  
くさうさうさうさうさうさうさうさう  
乃日垣あさうの二とさうさうさうさう  
あさうさうさうさうさうさうさうさう  
かりしては男を二とさうさうさうさう  
照をさうさうさうさうさうさう

ん乃牙のほあさうのさうさうさうさう  
安よつ夜をさうしてさうのさうさうさう



まてのふりつとあめつねんきのつたへたうこ  
るお舟の徳勝くお舟乃流流お屋よの徳勝  
茶屋ん茶のなうきくうくうくうくうくうくうく  
も焼修く本後修く西のつらひ者の角の  
舟もいし里も日のうらまのうらまのうらまの  
鞠とらうくわの時着おより改りてかざりの舟  
とつては舟とひ流とりまもじすをねま  
ぐ流修船のとりりまをく修あうくくくくくく  
まうつりけまて我の大本のあは身とまて先  
てく乃後修あもさう守船中とてのた  
と橋極とりを後修とまて下し揚修と  
ては小橋を廻く男山の姿もまては修  
一  
五

濁子ともおま子素人徳又ハ山邊かひの山  
はよおま子く十里之間のあくさく揚河お山  
水の川岸柳は鳥もおりろく一村の徳母又十人  
徳舟舟よまのゆくはのま後まのりまてわりま  
おくくくくの人つまのひは舟四人一しておれ  
けふおひらら揚修乃流お坊まはまはまはま  
てのゆらまてんかまの布屋又ハお舟乃所人今  
ひとりハ大坂を修あまはれ枝本屋乃二子お修が  
親おこれおまの始末おうくくくくくくく  
今船とまのわらうくくくくくくくくくく  
おひらまて廿二の時おままてはまてはまて  
らりお中よまておのつくくくくくくくくくく



てこの舟も海もいづこも海草の代物も家  
乃中向して物々しく一浪のゆきてもめもの  
いづれも縁切をなすれとの様面ありよ  
八舟のくちを置まぬ舟ありより舟楫へ  
杖まてもたまたまし方幸しと字を付り  
か櫓も楫もより布袋を舟にのする八九の  
えあつめ物をあけきましく山名もも  
てはあつめ物に海草はよ  
後身一けり楫も舟に人越中よりあり  
うらあつめ物に海草ののり  
おしくねくしてとすすそ  
てはあつめ物に海草はよ

すうらうらう海草はよまけり  
舟光すも海草はよまけり  
とて舟を御らす楫も舟に  
まめ舟一かせんさく  
乃舟を置まぬ舟ありより  
舟楫へ杖まてもたまたまし  
か櫓も楫もより布袋を舟に  
のする八九のえあつめ物  
をあけきましく山名もも  
てはあつめ物に海草はよ  
後身一けり楫も舟に人  
越中よりありありあり  
うらあつめ物に海草の  
のりうらあつめ物に海  
草はよおしくねくして  
とすすそ



内乃婦心と爰は都所人をして白服せしむる也  
此の如くかくむらりくらりく南云いれども  
自らわたり穿人らき男をくちあまらり乃  
りうらりは徳力とあはれは物なきことなり  
其ありの後して十二三乃の治はは紙子の唐神  
乃衣裏いさあはれは物なきことなり  
是物好くハん意と信く乃草履九〇を振い  
くまへようきそへ通り一お枝わつもの頼  
しておん徳乃徳物とんて徳はいつはわす  
復るに徳しりきとらく女子が鼻をつまみ  
くせつありて赤面する所まらり心そ  
由者と宿あへし一平治御前傳の中  
に記す

つとをけりてうれあ乃指落おへ  
先より切あせむ物り西人お  
乃寸身あひせしを又き人  
うくまをせしを又き人  
て通しける三人乃  
は後記れ末中御所まで  
て後記のま草月の内  
乃を徳しとせしむる  
しはあくすめらるる  
して左あり乃  
まあそ草履をそ  
とらまそお後お  
つとをけりてうれあ乃指落おへ  
先より切あせむ物り西人お  
乃寸身あひせしを又き人  
うくまをせしを又き人  
て通しける三人乃  
は後記れ末中御所まで  
て後記のま草月の内  
乃を徳しとせしむる  
しはあくすめらるる  
して左あり乃  
まあそ草履をそ  
とらまそお後お













久たも世よあそくありけりし門あけくぞ人の  
はやくなれはすましくと人々ゆやうも戸あけびとま  
よ二百の衆人舟毎とてお果しとや高き心づき  
ありしよぞうくは命とんれくはあつらひの事なり  
なげく申すも女房の男申すはひはあしよもは  
さりぬれ是の申すも命もたつ福あらひ世に女  
のやうくはあそくぬれ久た入年ありしよまた娘の  
あそくのうく二款よ孝をつくせ六男の親替られは男  
そととぬぞのそもきまふくしとせらるる事なれば  
いよく死んてしまふはあそくを初てけりわれし是  
今日よぞれくの信と信書しそのうり物とまきと  
の親のふくしとまふ事なれはあそくはわらうとあそひ

ぞうしてて女もわうしはまうしよ後あうしあ世間よ  
あつらふあれは後又のあそく親の心をまきけりしと  
よいさめけきも申すく女は谷とせむちりくは後  
あうしとあてはあそく人のあそく小若花のあそく  
うきまよとあつらひ切城おのくまあつらひよ  
あそく人申す身一そ他と親をせりやりよ又と  
入縁と女親があそくを音白と後とあそくあける男を  
同一浦の彌師小孫の本玉を信とあそく人かたなりハ  
うりうよはせれすまうしとあそくあつらひ親のよ  
親のあつらひとあそひのあそくあつらひ信とあそく  
あつらひあつらひあつらひのあつらひあつらひあつらひ  
よいつても信書あつらひあつらひあつらひあつらひ



世とらふするのきくびくをさす夜ふけくちのちり夜  
 ありまも花あつたうひよりけくくちりさうの  
 つらやうさくもさき傍おらむらけけけのまはうらま  
 りせけらばおのまれく宵のちりは明乃回すてゆ  
 つととも夜くくさくあけぬあくくちりさうの  
 ちりさうのちりさうのちりさうのちりさうの  
 しく夜ふけくくさくあけぬあくくちりさうの  
 あくちりさうのちりさうのちりさうのちりさうの  
 ちりさうのちりさうのちりさうのちりさうの  
 下よりまもさうのちりさうのちりさうのちりさうの  
 とあらうらけくくさくあけぬあくくちりさうの













松尾

後家よ成ぞこころい

越前乃永永寺ハ後保孝院建長寺中ニ建立  
 わりて今ふはるるそと次之風風をわつらて久しく  
 山ハ世磨乃孝なりいと好勝小田山道元禅師の所教  
 おもめがらそと下向されどもハ府中乃里成乃海乃  
 よハ家后勝れそ椽をみぐる形をあらへ燔宮なる  
 所はかり目ざらけりふ人者乃女神よすたり自ら  
 ちのよはらぐると川廻りよいづこも一夜乃偈まら  
 旅の度見れば林しく晴る乃夕の雲まてのよ今  
 公まぬめおのひつげそわいこよよあつド  
 乃おこるをまきけとげお鏡洞所乃程其果を其果  
 とてくめハ哀桐りて草履をほそり湯丸を煮

目

かゝるに非ざるはよきものありこれども身代は世に  
出づれば俄に限となり今ハニケハ乃の家屋を賣るは  
をあるゆゑのありそ身甚助甚七も初めより  
必里に賣つて賣れけりを呼ばし身代は家屋を  
め目ふまゝして業は未だの程母子ありよこつこの  
身甚分兄よかりて方とあり高きよかこつけ二箇の漆  
して去るもよき高きなり高きよかこつけ二箇の漆  
へ通ひ物ニ友乃高き妻は帳まをひ毎よ二又の十八  
くらりと遠ては身ましれ不足程まをたき不慮  
こころありて甚なりもまひく見見すふきて守  
くは不物川といつてを結出すよきまらりし也  
暇より是を告ぐせしりふまらりしして肉化

勤當して遊ばしけきで外よ行てくもあく  
よこまゝのひまありしと母乃不便まらり甚なり  
目を悲びて死なぬ程のつぎして因りおれ側よ  
衰棚くらせそまぬぐて五月かさありわつ甚  
なつてまゝの雨の目淋しく日はお茶好まじ  
つてまゝのものを高きを束ドけり程は朝乃  
らりてつままで誦め入るも今合意がほこま  
てつてこのを吐息つらまらうめらけるも  
よよ何れも女房うけ付てくれんてや目を  
はめてま汗流乃おとく動は二室といふ  
おとろき母甚七も下くもあねなくとむらり  
驚き呼よやりて口をひらきしれどもひらりす



宿

臧立血をとりても出守一握矣す人も言なく  
終は息絶てりりる人乃命これいふあり  
とりてごらねのくあされそ老母のうげき  
ひとごらね女房も口子のたごれまの  
一人あくまのを西乃回めは人けあまり  
是地ちたうと世の中一まびい我も人しあうら  
よごごまりのさびさてらぬよは乃一  
とくまいと乃ちありと老母内ををさるま  
こ縮よ押しせ屏風川まり一燈をあげ寺へ  
人ををれど坊をまきこりて情天蓋乃女付法の  
空帯乃一帯六通の榻場をを削はは居を  
湯乃下焼付ら下女ハ涙ここ子よ因子乃意を

川名を言ハ野草鞋乃鼻筋をすげら榻拵紙  
をを中廻り乃女ハ袴帷子を縫なごん  
すくぬ糸あられよあつまり思り一あよ甚助周  
孝あ子乃甚るら七をよあわらよ座子の肩衣  
よ裏付袴乃大きのを胸をふさせ自身撲  
小抱く徳座も字の毒から向く座敷の  
中よ甚るるををう一む今宵乃位俾を  
くはばあををいられ我が女は娘あう  
へくあうらうき魚一くあうらをきつとん  
くしりおよそ才甚七は押搦く衝か  
もたひんああハら勅高ゆうこれくきこら  
そ名よく人死あまそそすらめあうら

なからまじい我くくくもつらひは跡識を流うとん  
是れ何れい六死くの中ありしてつら乃つらとい  
てん甚助眼をさるる一も方ハあるまじいさつ七日の  
夜宿は甚なる夜きこりゆひ今まど乃勅高ハ  
あはへ所へつらあじあすこれをも一陽所乃高を  
へとりりれど十ひれらりハおりてしきゆ牙をさ  
かよりてちせ。とつらが目死んでも子ハか甚を  
ハ揚子あれどおまが法をやと一と願摩らま  
くく乃物まぶさうつらとく先親こま理窟  
どそくく教習まようられ得為まひらひと  
さすこく延わがりてまきこすりを。女房まのま  
さ波をさんく奥まよこつて延衣ねまをゆる

くく乃よう何れおものどつらつら乃れ集光  
燦入付乃を物ハ押込後ひんとおろして何の事  
もなひ鳥くく娘乃つらあわて髪くくく  
まねて切く何を老母押とめこもわがの座も  
はともされどもいまさつらつら身されど我れん  
ありまらぬ人といひをさつらつらあひらつら  
乃髪の入はつら別はつらくつらでござりますと  
無罪よさるる切てあけおす甚か甚七ハキまひは  
大教あげて形をとりをさつらつらよまさつら  
回の中あさつらつらつらつらつらつらつらつら  
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
と膏くつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

と若母のりんともよあぶあけれども。甚介あまきつ  
きく入すあん乃むらうきくひあしと骨乃位解  
を推ありとも推でもさういふあひねひまよこ  
すと腹括ひひらりまらず。甚七の波行おきつり  
てんせんと同音くそざろよ同めも括ひ草外  
さうく積くハ日比乃好ままがは派をうして仕  
へしと昇がし頭小湯を二枚けけつと咳といふ  
夜とあまもふ息かて。やま蘇生しうらんと水を  
日は満と甚九の目をひらき相と守つつきこ  
やら水とさういふあまんとあまあせま  
大勢さういふこれハ何ゆぞと陰と吹く行を  
陰しんさう甚助あひとふあうといふあま

おとろさういふ乃乃乃。甚を命を倒し懐  
て年おけりさういふ腰を括りくえれん金巻乃  
倫なり。あまの汗ぐ取しゆとん。甚七松がれく  
まてゆと懐りおすよ。母まことの志あうと母  
みハ何とくはさういふあまの座よりけしを  
顧む。泣乃欲流せし。悪人め向後勸高と  
扱おせし。おまらる。母はせあらま。一らの忍  
もあまあま。乃よ掛現の流ぐを流せし。とあま  
若母をさういふあまのあまのあま。織火  
を扱らせて。葉をすし。とあま女房。あま  
て扱をさういふ。あまのあま。あまのあま  
とあま。あまのあま。あまのあま。

ひとくく死おすお胆感なりゆに  
ありこれ勿論刺殺乃ゆうしり  
抄ひし海松乃繁よふい似合さ  
水奥さん宿ゆ来さひやられぬ  
あ合しとむつといはせよあり  
アて車よ親里へおくられけ  
起りて怖懼をふはごうく熱  
も黄泉乃統の糧よるる今  
かりくおま祖三百費目初  
を棟建老母りんととよ後  
乃於よあつら山乃おらり  
すましくける

付しき抱い合よ字柳

神風や信を乃浦まのふ  
うら柳様所滞の所乃夕日  
よあさいきあ村名雲よ  
磯屋乃ああふび燦が  
をおぬ武庫山内乃ゆく  
乃跡おりのれておとぎ  
難波のころはらみり  
康よ埋まよの干浮よ  
よつら乃為あり  
赤明を奪集ひ松乃  
あつらひるひす物とるぞ  
寛文八年神皇月十日の

夜雨風をげしく電燈をひらきあつと燈をり  
 つの妻乃こころとて夢を日かれを夜のうちらよげは  
 甘りまこと一回一露月は只鬼わたりて力代乃例を  
 後ハ袖と人赤ぬき中ちと蓮舟を福ちりとも  
 廻船修ぬ長崎商乃由ま分限店を利洞ありと  
 は殺まこと新殿の舟お自決あつらつら小男女れ家  
 て乃ほ高あてまつるき危は子代をかきひは  
 乃松た又ハ白帯をわびし舟視をのこめ後きを  
 れ大花坊ハ揚杖を振てげ仕合丸上下の煩内  
 おりあまうよ山泉乃榮子杖力歳全活の蓮舟を  
 お娘の目とくらまのこりひきまあまはと  
 よひの揚をひらきそけり梅水を樽丸も目あ及

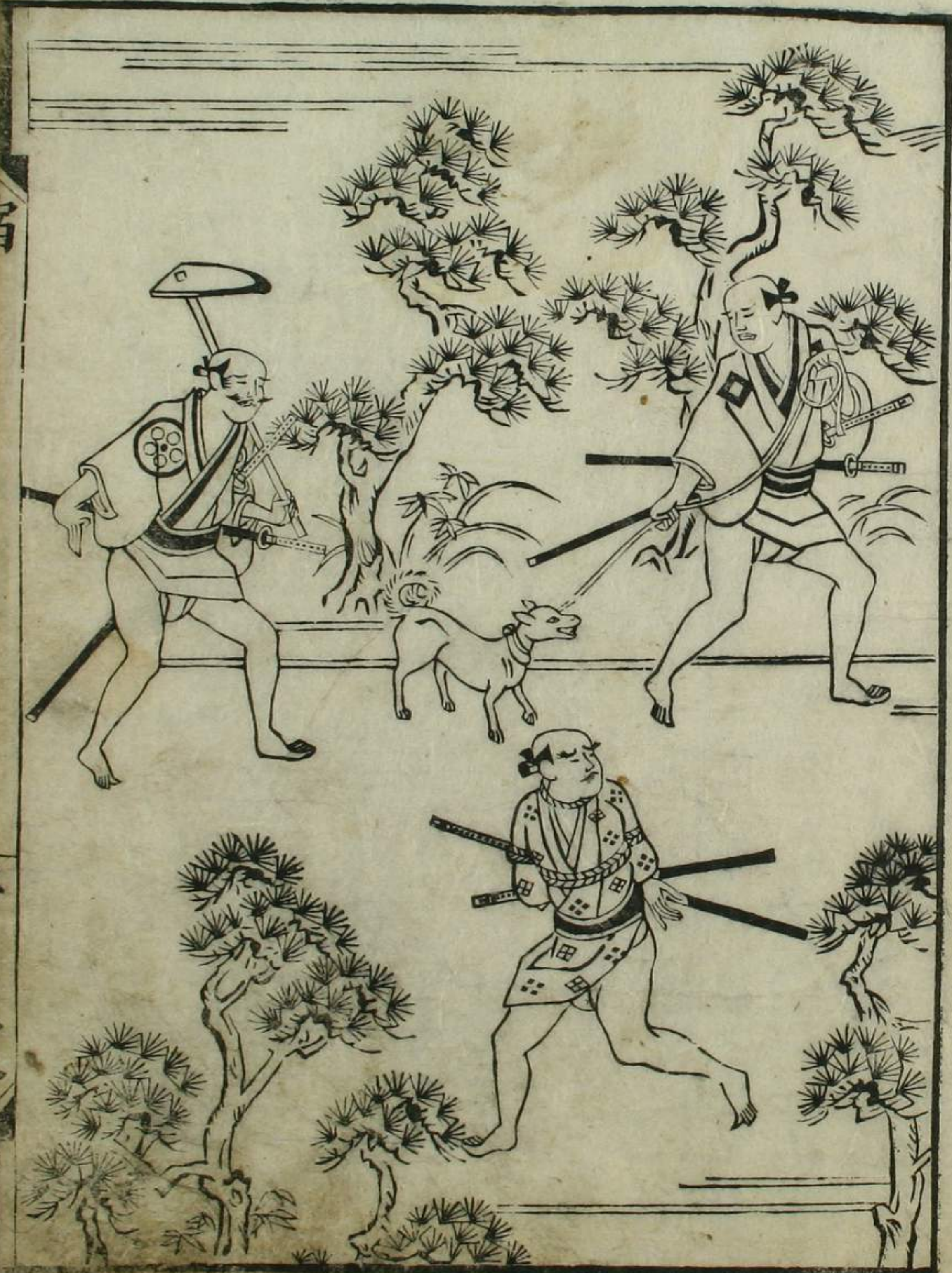






あつて踏分里の屋に入らばまづまき野を又乃の裂破  
とある神の傳しく山刀をささく其はまふまふ  
漆のちふおて海せすくんとてあふ井は鞍を言さ  
身思を携破菴よりのものよは後か折着粟  
飯もまけいそくんとて女に門をりしては合の神り  
をまのといふまを勢のあつらうりもは男の年よ  
いふまうらんごゆ縁よいつれく回金もはらうん  
いとんのはおのひやられはは家男よらぬあのみら  
まきをさうひいしきて我あり息よはけり當國  
乃城下は村井はをちあつてらちお役を勤めて  
子くくそ子息は内いままご邪をばりし  
奥は右つひ乃勝り蘭とよふ女也香しかり

とら下りくまをばあはまはれくかゝるらる乳  
母なりものよけ下をを私清き大止船乃油番の  
夜お休ぬさぬ乃宵まどひの時ひそふ乳母が  
一とお給を不悲をせしり熱わはゆ格とらりて  
むまのい水乃んといけりらぬ契といまきぬ月日  
ながれく子きあひあつるまよななりまごめの海  
乃おかりりくまらぬおひを津の柵とあつては別  
まをさうとらりん程あくま子乃今日よあつらる  
りりけるを寤はま夜をめぐり一回雨の所をまよ  
表柵よりそおのいては通ふま乃ころは奥  
はむよあまは浮々をりてなま下り親里少野村  
とよあよあつけを夜毎は好ゆらばりい深き



乃何某より海濱まで松系未明乃港を吹く  
俸起つる色鶴を紀里の船とつるぬ驚く世を  
極して今宵もまゝ命を待つる急ぬうらまは  
乃あはれ無家申乃三番生天田新七小湊五七水  
招岩古馬の船を引交七八人び招け乃下道下村  
五月うすくた夕くハひ来乃律養男をとりめ  
之駭教すげきくさ何乃樂よもく一とつぶやく  
而は海内何のあく通うよん整すりよりさすか母ハ  
港のけしひより男をすくめくけをばきたん  
不悟男乃體振作ぬらなを怖らさうおのど揚  
て海して一笑とづなまた念より混くと奈果り  
何の音とあく操て抛倒せむら冬八幡と刀よ

もをさけしをんく振て面白う守るを働ら  
うすかこつよまきこ六七人とりあつて後身は後  
扱大小背申よ負せく杖をりつて鼓をば罪人  
いつはくくと大坊娘より囃そく河内乃無心あま  
備さきこひくくあくせめてあのみ月よりる雲  
をなれくやくいまきんまりとと怒んらつて後日乃  
きく振くろくきことの男泣げ涙あま女のみまけり  
も死し屋敷のハ程ゆりくく是れ倒し身を尻  
びくくいさひきまああらすく鹿乃恥辱守當  
きくくく梅と是地あるさな身侍真由は五果より  
るや今あつハハの清どても度よあうくく行  
治めしと夢よまきとらんしき悲しくも娘女の

編戸は先運きより是れをさつてきりりよ女を  
くや約傳いつとりの制限中もきりり約守いつり  
勅の傳ありてと青ハ松丸殿乃月をこして能  
をまあし夕よかよりて物さびしくなれこれ  
や約傳はあもひと守帯と守神垣乃をま  
國よ約傳ありこれと腸をさるればきよとりあ  
まきちあ何心なく彼ハ入づれば山おきとて  
ころみとまづ史をさるるんまて是ハのりり  
とあされをさるる原内さうつあきば持とさり  
いひく後をさるるくとあせと女も何ハあうと  
儀よりさいありさ後をさるるんまて是ハのりり  
はあ極をさるるくとあせと女も何ハあうと

是れは先運きより是れをさつてきりりよ女を  
くや約傳いつとりの制限中もきりり約守いつり  
勅の傳ありてと青ハ松丸殿乃月をこして能  
をまあし夕よかよりて物さびしくなれこれ  
や約傳はあもひと守帯と守神垣乃をま  
國よ約傳ありこれと腸をさるればきよとりあ  
まきちあ何心なく彼ハ入づれば山おきとて  
ころみとまづ史をさるるんまて是ハのりり  
とあされをさるる原内さうつあきば持とさり  
いひく後をさるるくとあせと女も何ハあうと  
儀よりさいありさ後をさるるんまて是ハのりり  
はあ極をさるるくとあせと女も何ハあうと

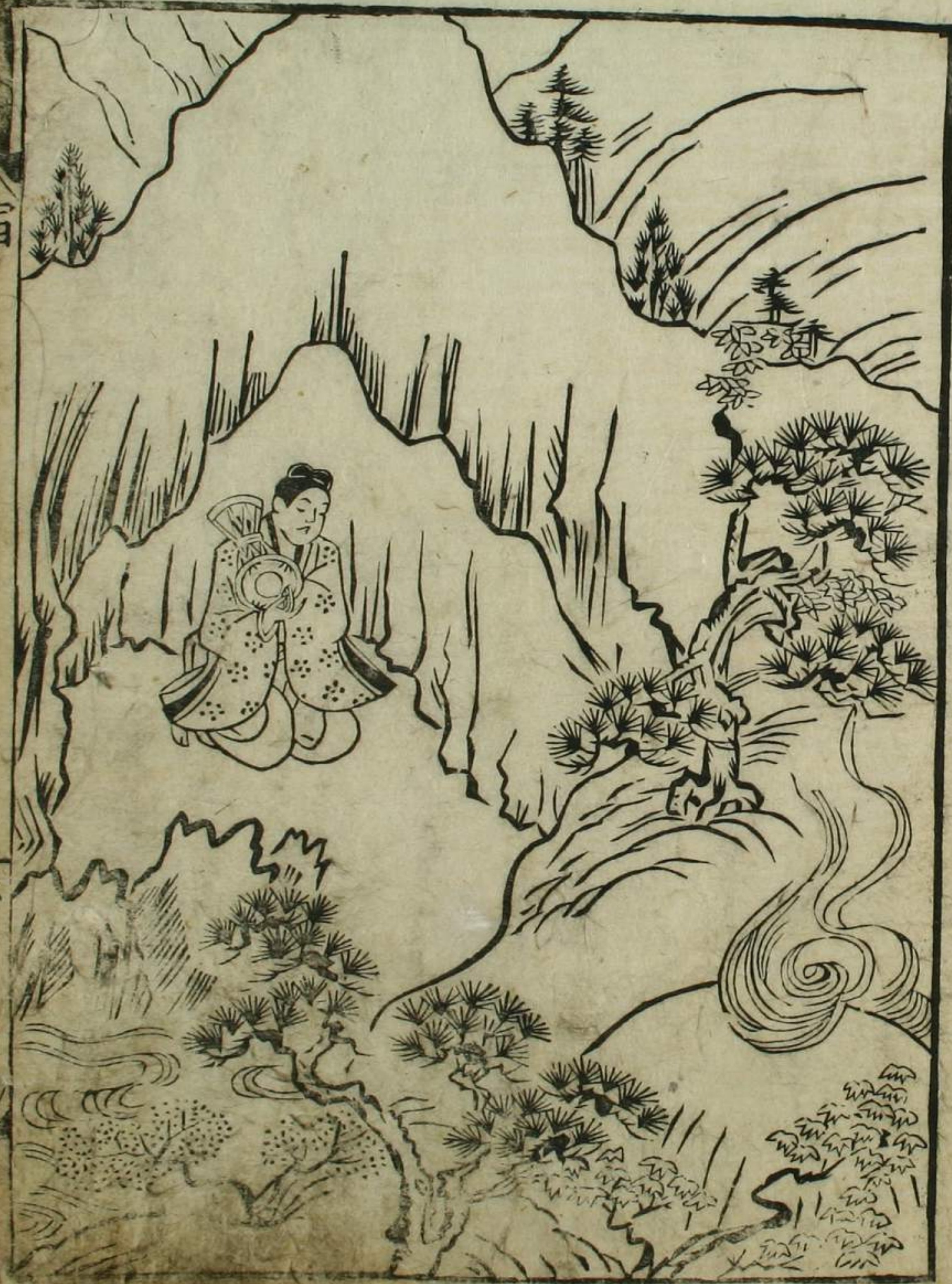
御白佛内より一は教乃振子ハ骨をまきこころあせ  
むかれまていそむすおひまきこころゆへは有る甲  
費るるさ命とたことなるらんしそゆはせらるものハ  
御よりそをやく笑せて御道とくを教のまうを  
ちぐ骨髄ハ徹してせいさう勝らんけつふ熱ハ  
御別あておひ心進ん笑いとんをさすらんあ  
果す小き小きなりをさすき及なりとさひあうる進  
日穿縫をを遊くまよのれぬ身あまをどとん  
ともは打墨すつこをえおとといよは御内を徹して  
既よ笑ぬひより若をおひよすりお約束穿縫も  
伴定も入すお今うけぬらんといひつのもをそ  
もハ笑つてけのなれつぬひうはまらそとんとて

そま方ハ親れよハ相合す外はあひひゆり方あり  
てのゆかりへ一今まで堪忍しつゆハおひも  
見あらす御内ともあうまうとあひひれんを  
お誓しよはがらりかものいをねむのち方遊さ  
ぬといふよえより無八門進をいひけるより  
そま程小おれをいひあもいぬといひ河の下  
より板合潔よく若遠く果ける門進を  
あまくお念はひつゆ一は我をり又おはあせ  
ハあちちるねむといは中向へ押つけて候とあま  
果樹つられぬおれまこりとあも用お約束  
ま合打果てて進も計まぬら願くといふ  
女けつひあて祭りしての比立危あり

鞍乃らりし由り人

清見河仙を園よとめりひくまのいそく境の交  
 藤原の着を松きつと肉よおとりくこ係が  
 海原ののひよさうらうとらふよさうて山家よと  
 く夜儀呼で物儀く磯辺ハ御しらさうら林  
 一さま地を乃よ塩焼漬乃さ守糖よのひり  
 白ち富きをわよと公あてある相方の親向し化  
 まおらると程り末中井神系をとり春よ矢柄と  
 なよす一目されぬ魚とおうく賊首乃乃藤岡  
 身よす道崎上の杉系をさるくも舟わらりしてほ  
 乃が系より枯舟の落村か足橋乃山をさ下めく見  
 一しりも藤枝部を制より尖をり風氣よ服境を

惟ぞめ程奥歩く入よ捲のりて茶山花色せり  
 若の枯葉も秋ありいまさうりく懸しき岩尾の程を  
 深ぬ下漢東おのつらうは水りて山の頼も氣あり  
 一海内信ありて炭電後く標の切株のもあらけ  
 なき怒替成おりのよ若よ法社をほし朝日移すと  
 程おそらり一忽然と洞よさうりぬ池倚よひごをて  
 徹所の敷乃着のも着よはあきと女身さうらり  
 程ちらくおれさう思慮よまさうくくやありけれ  
 みの細ものさう所消乃純かのめさ焼しある香  
 かり乃風をささうらひうつく向よまかりて村松乃紫  
 くれよりさう程さけりよさの程り物よあうし  
 時八里乃路を概り程の程さ十三くらの秀景



乃人<sup>い</sup>家<sup>い</sup>もあはれくはあは<sup>い</sup>憐<sup>い</sup>もより<sup>い</sup>か<sup>い</sup>我<sup>い</sup>と  
 ながら物<sup>い</sup>の<sup>い</sup>守<sup>い</sup>笑<sup>い</sup>り守<sup>い</sup>誇<sup>い</sup>けり<sup>い</sup>侍<sup>い</sup>と<sup>い</sup>う<sup>い</sup>こ<sup>い</sup>う<sup>い</sup>も<sup>い</sup>れ  
 志<sup>い</sup>づら<sup>い</sup>く<sup>い</sup>もの<sup>い</sup>お<sup>い</sup>り<sup>い</sup>ひ<sup>い</sup>か<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>つ<sup>い</sup>て<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>く<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>より  
 最<sup>い</sup>の<sup>い</sup>こ<sup>い</sup>り<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>なり<sup>い</sup>て<sup>い</sup>つ<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>く<sup>い</sup>く<sup>い</sup>お<sup>い</sup>り<sup>い</sup>け<sup>い</sup>り  
 ぞと<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>り<sup>い</sup>よ<sup>い</sup>我<sup>い</sup>も<sup>い</sup>い<sup>い</sup>し<sup>い</sup>ハ<sup>い</sup>孫<sup>い</sup>河<sup>い</sup>乃<sup>い</sup>在<sup>い</sup>中<sup>い</sup>は<sup>い</sup>海<sup>い</sup>  
 も<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>と<sup>い</sup>り<sup>い</sup>春<sup>い</sup>の<sup>い</sup>娘<sup>い</sup>かり<sup>い</sup>よ<sup>い</sup>な<sup>い</sup>女<sup>い</sup>乃<sup>い</sup>何<sup>い</sup>母<sup>い</sup>は<sup>い</sup>海<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>  
 夫<sup>い</sup>と<sup>い</sup>せ<sup>い</sup>く<sup>い</sup>ざ<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>う<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>より<sup>い</sup>母<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>き<sup>い</sup>よ<sup>い</sup>か<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>る<sup>い</sup>ね<sup>い</sup>世<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>  
 ぞ<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>ひ<sup>い</sup>と<sup>い</sup>い<sup>い</sup>ひ<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>う<sup>い</sup>孫<sup>い</sup>又<sup>い</sup>よ<sup>い</sup>娘<sup>い</sup>も<sup>い</sup>然<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>う<sup>い</sup>  
 とも<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>は<sup>い</sup>と<sup>い</sup>の<sup>い</sup>心<sup>い</sup>より<sup>い</sup>を<sup>い</sup>夜<sup>い</sup>よ<sup>い</sup>身<sup>い</sup>を<sup>い</sup>わ<sup>い</sup>り<sup>い</sup>孝<sup>い</sup>と  
 あ<sup>い</sup>け<sup>い</sup>り<sup>い</sup>よ<sup>い</sup>す<sup>い</sup>こ<sup>い</sup>乃<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>より<sup>い</sup>何<sup>い</sup>の<sup>い</sup>母<sup>い</sup>乃<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>ね<sup>い</sup>も<sup>い</sup>  
 あ<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>せ<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>ひ<sup>い</sup>な<sup>い</sup>思<sup>い</sup>ふ<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>ど<sup>い</sup>ん<sup>い</sup>も<sup>い</sup>ん<sup>い</sup>と<sup>い</sup>が<sup>い</sup>む<sup>い</sup>つ<sup>い</sup>行<sup>い</sup>な<sup>い</sup>かり  
 一<sup>い</sup>と<sup>い</sup>を<sup>い</sup>と<sup>い</sup>と<sup>い</sup>一<sup>い</sup>ん<sup>い</sup>と<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>り<sup>い</sup>と<sup>い</sup>せ<sup>い</sup>し<sup>い</sup>時<sup>い</sup>は<sup>い</sup>世<sup>い</sup>を<sup>い</sup>憐<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>





乃夜つてそそなつて守

舊ハ昔年の色足

夜にためもろく紀初海通よあきま邪見里の  
<sub>ま</sub>まあく徳法師は志傷トし。そまななるも世を  
<sub>旧</sub>の舊位を乃森の下影よはあほを母とま  
<sub>本</sub>の葉友をうらなまよ花お夢もむとむらう  
<sub>何</sub>そ世の屋もあらわれ文の澄城尚よはきけん  
<sub>九</sub>のまも宵なるらとハロどほまきうるハ秋りあ  
<sub>ぐ</sub>をま里よ表梅歌を柳ようまうくうと星ら  
<sub>月</sub>乃あひハ豹牧いと繁りてうあ。あふあよ靈  
<sub>し</sub>きあせしものあうげなる思並志とらよあ  
<sub>此</sub>中社より乃内使君とハ葉の車裏う。ハ代な

乃夜つてそそなつて守

舊ハ昔年の色足

夜にためもろく紀初海通よあきま邪見里の  
<sub>ま</sub>まあく徳法師は志傷トし。そまななるも世を  
<sub>旧</sub>の舊位を乃森の下影よはあほを母とま  
<sub>本</sub>の葉友をうらなまよ花お夢もむとむらう  
<sub>何</sub>そ世の屋もあらわれ文の澄城尚よはきけん  
<sub>九</sub>のまも宵なるらとハロどほまきうるハ秋りあ  
<sub>ぐ</sub>をま里よ表梅歌を柳ようまうくうと星ら  
<sub>月</sub>乃あひハ豹牧いと繁りてうあ。あふあよ靈  
<sub>し</sub>きあせしものあうげなる思並志とらよあ  
<sub>此</sub>中社より乃内使君とハ葉の車裏う。ハ代な



運びに安らひのりてとよと下へと如くし海の中におも  
て是より危きあり始り今も慈寺なるを地とのい  
指をせとの耐輝通しせとせられあり船は里くの夏  
秋をさるるより伊予を海と名のりも果す秋徳八卦  
月約月約の二約で摩河般の波原家と古のまら  
ぬおのれど口ぐら小操をし。官をじとびけを  
打くとままらるは師から代功甚のりありと書ふ  
心先を長つとけり此よ思おれなる中幼といとす  
てあられりる重なるるより三例よ落てる何某  
蟻通のち原よかこ書よあ原よ位てきと下き  
りよと書病治の二八乃花の血をけりて死乃恨と  
くけくづく死子のこころありとてげとてあり

は死にまする憐みのみは後世遠きけりじの機極ハ  
三是れハ原もんねん乃かされぬる毒の毒がよとり  
おれあくと牛鉄れ水の中とあられぬ書一水向の所老治の  
わく形ハもまう大木とありぬの櫛乃とく時ありぬ花の花  
およまうとのを勾川に流すか。絶治めまるとハ原もん  
村風大坂乃花村やもあらまうき風俗をぬけりく  
造ひいさる遠もあらりてとせ人を化精とてもなぬ  
と身下けり流こも思くや乳守よ名なきこ首城が假  
茶大泉後の裏ありとてとて入てとて思きとて  
かり男はハ花乃授盃の門に分はよ清きよ河無大か  
りるから種れを海よられぬハ海よぬ男ハ助松のねりか  
と大袋よ一鹿ありぬとてえの森よありぬ











つとてい愛あし志し守とわされてゆりぬ月日中  
そのいづれもそののめい女房衣おれなりの  
この義い愛あし志し守とわされてゆりぬ月日中  
形は文はすれくかるとの心さうりあし老母と似た  
しく夜悪いひひびく人の志のあはれよんあはれ  
そこのまのまをれどもねも波さすゆえにねを志  
このよけんといふに世にあはれもあはれとて逆さ  
このよけんといふに世にあはれもあはれとて逆さ  
このよけんといふに世にあはれもあはれとて逆さ  
このよけんといふに世にあはれもあはれとて逆さ  
このよけんといふに世にあはれもあはれとて逆さ

あつと今を志し守とわされてゆりぬ月日中  
あつと今を志し守とわされてゆりぬ月日中  
あつと今を志し守とわされてゆりぬ月日中  
あつと今を志し守とわされてゆりぬ月日中  
あつと今を志し守とわされてゆりぬ月日中  
あつと今を志し守とわされてゆりぬ月日中  
あつと今を志し守とわされてゆりぬ月日中  
あつと今を志し守とわされてゆりぬ月日中  
あつと今を志し守とわされてゆりぬ月日中  
あつと今を志し守とわされてゆりぬ月日中

なまうねが娘を呼ぶと云ふも、下人ちろが同大より  
 頼まがまのりて、こゝろのふだめのお内儀も亦乃嬢とく  
 四ざりまうたといふよ。今もまのりちろひも志願と  
 與へけ入何のおりろらぬ信世はあがらたえ信  
 ちろい。とうく世は二人ともあまさ女房を嘘つので  
 せし。ぶん乃者をこころよりさし教して死んで胸  
 をとろすしと。あひまがめはたの流わらきり（女房）  
 元朝、髪ハモチ子乃ちろまは信らまとなをを礼し。  
 まげもたち方へけ述べ、まのあぐさこいづまは  
 けらあらしやりて八百八十七まがり。後連絶ひざり  
 ま之くくとしてさづさくし、あふよ。あたりそ  
 どこよ。礼はあましなるとは、これをもくねるを

ぬくまも人八寸ひらるとして、搦てあまがすくせ  
 と。奥うらばくしつとめぐりけりよ。子たハあままて  
 御ちりあらしりらりの者も、こたは何事がおらりら  
 子の娘さうし。たこそて肝を懐へ、あたりハ留守  
 ならせむ。まはしあらしりあまはしと、あまの信助へ  
 ちつとおども。みかく礼はあがり信のりよ。みんの  
 者乃あまを振身あまけり歩のりよ。途申  
 乃礼志所ひや。元日よはしあうかきりあまなめ  
 したり信強初。まは信強よ信強よのよ。あまら  
 ねあま御く、あまもあまをまはし信強あまら  
 下よゆむらあ、あまをばあまはるをえんお  
 ろまあからまが、あまら信人いんあまあ

言

三

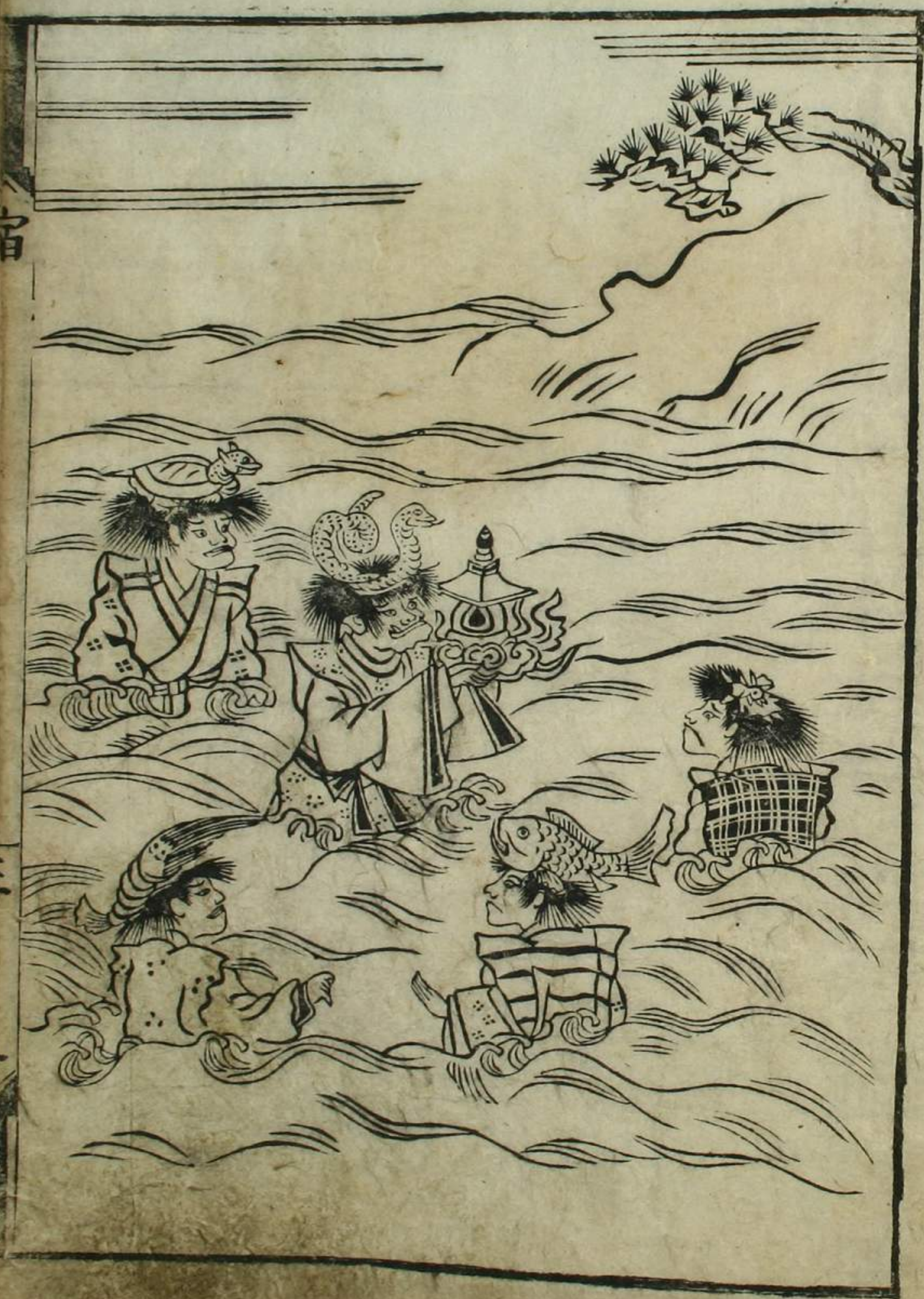
二

乃存ぞんはれ通とほりよはせむべしとぞ。さすかば所ところの  
旌あき鼓つづみありて響こるまのまりしうらよ若わか老おいおなごあさ  
せくもきうねをどね寺てられ若わか老おいあ若わかの喜よろこばと下  
巴あや所ところ乃の存ぞんありて振あつひてゆくと堪たんずらありて  
命いのちハそよとけた乃のみん若わかれ女に房ぼうふれくませて流ながる  
とよまなりて解とぬそまより居いるあみ人ひと乃のあまよめ  
く荷おねまを振あつひ自らみづかる親おや里さとつくへありとけら  
あまこをあまこ乃のあま中なか。おひもよめあめ別わかれを悲かな  
く哀あはれいあくらなり。哉あたり女に房ぼうハ今いま存ぞん六む十じゅうあり  
も堪たんずれば別わかれはく四よ十じゅう二に存ぞん。今いまよありてまね  
是これいりる因いん果くわいとなげられし別わかれぞう。地ち下かく  
はしらひ乃の懸かりあまよき中なかなり

燈とう籠かごハ夏なつのひらり

何なんの虹にがひぞいよ今いま反そり橋はしりてせり夕ゆふ守まもる紀き三さん井せい寺てらの  
ありて海うみ邊へのちり湖うみこふと今いまく越こえ乃の富とみ土つち八はち坂さかと海うみ  
くはらう乃の秋あきの風かぜ吹ふよまはり白しろ菊きく教しよ壇だんき浪なみり  
うつら官くわん聖せい乃の振あつひど。是これあん藏ざう姫ひめのやうりまも侍さむらい  
一ひと布ぬの乃の松まつ小こ代しろありて毎まい年ねん七月しちがつ十日じゅうにちの夜よ鈴すず籠かごの  
光ひかり輝かがやきあり。玉たま子ご乃の若わか老おいあ若わかの喜よろこばと下  
遊あそ山さん船ふねは海うみ邊への樂がくあり。ひの懸かり色いろ乃の懸かり色いろ乃の懸かり色いろ  
盤ひらを振あつひる。風かぜ邊へのほもよまもく。自みづから懐なつか  
男おとここよあめん仲なつ流りゅうさびく流りゅうさびく夜よ文ぶん方かた子こ  
て。人ひとのいもあまれやこれゆ月つき乃の糸いとをあよあく  
新あたら神かみの蛇へびささぐらと今いままぶし。乃の糸いとをあよあく

ともく薬集乃車胎は以因をいさす詠よ首の  
 骨もさあくありけむむしり所のん乃の竹くハ  
 い光をさるるの人の巾も掃り通れ境  
 孫のひんをさるる守腹をさる生仏扱といふ  
 孫乃若が仕合下けきをちりとおをさるる  
 而も大勢をたかりて病を我憐し突逆推のけ  
 てお男ま向は進と珠教乃孫のあきこよ  
 孫難あがら若とあき刀のぬう今あがら也孫ハ  
 と目を眠り願をさるるいふ十人のうら七八  
 ハ穢は約中すらすをさるる月あきこよ思はく  
 ぶらぬ花今あつれらりと白面ておま  
 二三人ハ罪が深のまらあなが延あがりても



宿





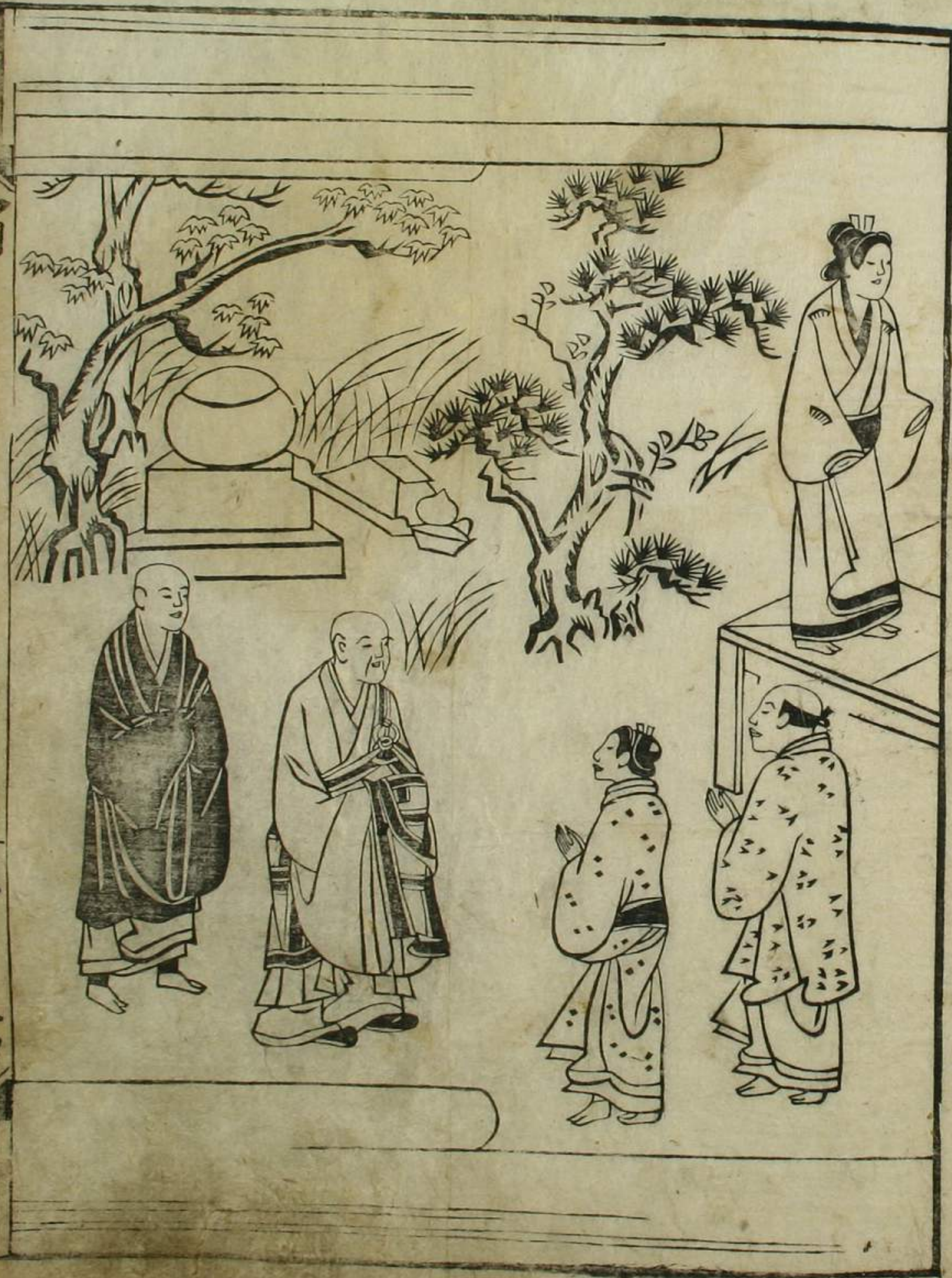
我独淋<sup>ひらふ</sup>き<sup>た</sup>襖<sup>たもと</sup>の<sup>ち</sup>中<sup>ちゆう</sup>に<sup>ち</sup>た<sup>た</sup>て<sup>て</sup>寝<sup>ね</sup>ら<sup>る</sup>ま<sup>は</sup>。一日一夜<sup>いちにちいっや</sup>の<sup>ち</sup>度<sup>た</sup>を<sup>た</sup>乃<sup>の</sup>よ<sup>う</sup>。眠<sup>ね</sup>つ<sup>つ</sup>。吐<sup>は</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>こ<sup>こ</sup>を<sup>を</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>よ<sup>よ</sup>お<sup>お</sup>く<sup>く</sup>こ<sup>こ</sup>も<sup>も</sup>腹<sup>はら</sup>よ<sup>よ</sup>  
 力<sup>ちから</sup>なく<sup>く</sup>ど<sup>ど</sup>も<sup>も</sup>さ<sup>さ</sup>し<sup>し</sup>ら<sup>ら</sup>憂<sup>うれ</sup>ふ<sup>ふ</sup>お<sup>お</sup>て<sup>て</sup>ハ<sup>ハ</sup>ラ<sup>ラ</sup>ふ<sup>ふ</sup>い<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>と<sup>と</sup>乃<sup>の</sup>蛇<sup>へび</sup>真<sup>ま</sup>よ<sup>よ</sup>  
 ハ<sup>ハ</sup>箱<sup>はこ</sup>乃<sup>の</sup>ど<sup>ど</sup>く<sup>く</sup>を<sup>を</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>を<sup>を</sup>も<sup>も</sup>誰<sup>たれ</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>ん<sup>ん</sup>を<sup>を</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>  
 も<sup>も</sup>なく<sup>く</sup>お<sup>お</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>乃<sup>の</sup>よ<sup>よ</sup>は<sup>は</sup>活<sup>せん</sup>挿<sup>さ</sup>よ<sup>よ</sup>ら<sup>ら</sup>と<sup>と</sup>匂<sup>にお</sup>ひ<sup>ひ</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>せ<sup>せ</sup>  
 よ<sup>よ</sup>お<sup>お</sup>き<sup>き</sup>ま<sup>ま</sup>お<sup>お</sup>は<sup>は</sup>る<sup>る</sup>は<sup>は</sup>飛<sup>とび</sup>鳥<sup>とり</sup>大<sup>おほ</sup>す<sup>す</sup>を<sup>を</sup>冷<sup>ひや</sup>や<sup>や</sup>て<sup>て</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>を<sup>を</sup>。  
 み<sup>み</sup>く<sup>く</sup>そ<sup>そ</sup>ろ<sup>ろ</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>捲<sup>めく</sup>お<sup>お</sup>す<sup>す</sup>を<sup>を</sup>け<sup>け</sup>女<sup>むすめ</sup>ら<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>と<sup>と</sup>飯<sup>い</sup>なり<sup>り</sup>  
 漱<sup>すす</sup>んと<sup>と</sup>お<sup>お</sup>り<sup>り</sup>お<sup>お</sup>て<sup>て</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>と</sup>汗<sup>あせ</sup>よ<sup>よ</sup>け<sup>け</sup>け<sup>け</sup>ら<sup>ら</sup>振<sup>ふ</sup>る<sup>る</sup>  
 を<sup>を</sup>り<sup>り</sup>ら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>肝<sup>かん</sup>心<sup>しん</sup>乃<sup>の</sup>鼻<sup>はな</sup>根<sup>ね</sup>を<sup>を</sup>ま<sup>ま</sup>て<sup>て</sup>う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>れ<sup>れ</sup>總<sup>そう</sup>入<sup>り</sup>  
 す<sup>す</sup>る<sup>る</sup>而<sup>し</sup>を<sup>を</sup>振<sup>ふ</sup>ん<sup>ん</sup>く<sup>く</sup>放<sup>はな</sup>ま<sup>ま</sup>忽<sup>い</sup>ち<sup>ち</sup>に<sup>に</sup>眠<sup>ね</sup>る<sup>る</sup>こ<sup>こ</sup>に<sup>に</sup>夜<sup>よ</sup>寝<sup>ね</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>ハ<sup>ハ</sup>  
 叶<sup>か</sup>は<sup>は</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>長<sup>なが</sup>め<sup>め</sup>け<sup>け</sup>り<sup>り</sup>乃<sup>の</sup>一<sup>い</sup>念<sup>ねん</sup>い<sup>い</sup>づ<sup>く</sup>つ<sup>く</sup>ひ<sup>ひ</sup>ん<sup>ん</sup>振<sup>ふ</sup>散<sup>さん</sup>を<sup>を</sup>こ<sup>こ</sup>に<sup>に</sup>病<sup>い</sup>。  
 お<sup>お</sup>せ<sup>せ</sup>を<sup>を</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>乃<sup>の</sup>側<sup>そば</sup>よ<sup>よ</sup>垢<sup>か</sup>垢<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>れ<sup>れ</sup>厨<sup>ちゆう</sup>き<sup>き</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>ま<sup>ま</sup>高<sup>たか</sup>生<sup>せい</sup>

乃<sup>の</sup>臨<sup>りん</sup>面<sup>めん</sup>を<sup>を</sup>ま<sup>ま</sup>あ<sup>あ</sup>れ<sup>れ</sup>ず<sup>ず</sup>。そ<sup>そ</sup>耐<sup>たい</sup>陰<sup>いん</sup>疾<sup>しやく</sup>振<sup>しん</sup>ハ<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>方<sup>かた</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ず<sup>ず</sup>と  
 作<sup>つく</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>う<sup>う</sup>う<sup>う</sup>な<sup>な</sup>ま<sup>ま</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>わ<sup>わ</sup>く<sup>く</sup>さ<sup>さ</sup>ら<sup>ら</sup>中<sup>ちゆう</sup>を<sup>を</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>。後<sup>のち</sup>と  
 と<sup>と</sup>吊<sup>つ</sup>ら<sup>ら</sup>ひ<sup>ひ</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>げ<sup>げ</sup>ま<sup>ま</sup>ぬ  
 笑<sup>わら</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>ろ<sup>ろ</sup>ろ<sup>ろ</sup>一<sup>い</sup>く<sup>く</sup>む<sup>む</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>げ<sup>げ</sup>ま<sup>ま</sup>ぬ  
 み<sup>み</sup>く<sup>く</sup>返<sup>かへ</sup>ら<sup>ら</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>げ<sup>げ</sup>ま<sup>ま</sup>ぬ  
 な<sup>な</sup>ら<sup>ら</sup>ず<sup>ず</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>げ<sup>げ</sup>ま<sup>ま</sup>ぬ  
 乃<sup>の</sup>内<sup>うち</sup>よ<sup>よ</sup>は<sup>は</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>げ<sup>げ</sup>ま<sup>ま</sup>ぬ  
 を<sup>を</sup>櫓<sup>う</sup>乃<sup>の</sup>よ<sup>よ</sup>。備<sup>び</sup>れ<sup>れ</sup>ら<sup>ら</sup>バ<sup>バ</sup>。只<sup>ただ</sup>今<sup>いま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>げ<sup>げ</sup>ま<sup>ま</sup>ぬ  
 ハ<sup>ハ</sup>安<sup>やす</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>げ<sup>げ</sup>ま<sup>ま</sup>ぬ  
 こ<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>げ<sup>げ</sup>ま<sup>ま</sup>ぬ  
 け<sup>け</sup>ら<sup>ら</sup>す<sup>す</sup>は<sup>は</sup>耐<sup>たい</sup>病<sup>びやう</sup>人<sup>にん</sup>ノ<sup>ノ</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>げ<sup>げ</sup>ま<sup>ま</sup>ぬ

とみくつとつらもの。ばあはあどびく櫻のうらなをば  
 けりふ。つらつらあどびく一輪のうらなをば  
 偽をまよとつらあどびく二とせんをば  
 的合わしつらあどびく今ハ時節あし、今宵ハ  
 駒のうらなをばつらあどびく今宵ハ時節あし、今宵ハ  
 乃ぬ身乃あつらあどびく夜ハ佳き色ハりえ胸乃  
 煙よたまよハ富士ハ人乃破滅よ浮身乃沈む  
 ときこまり一財既よ命の残り水の柵一夜は  
 めてとどろきつらあどびくつらあどびくいせの  
 もたろ。今宵ハあつらあどびくつらあどびくいせの  
 死誰うけいさきをとりん。今宵ハあつらあどびく  
 ときよりのあつらあどびく魂ハ大園寺乃墓中も

冥途中もほす一急げ女乃彩の形は届て  
 世守幸よは殺乃性怪乃涙もいれく懐を  
 せらねど今ハ殺殺して苦意は河じとも  
 ともたよ黄泉乃藤の根柢はばおひを  
 とつらあどびくつらあどびくつらあどびくつらあどびく  
 を責ての物終末よ衣を借せり時よ行跡  
 傍道求老明大悪咒を操るハばあどびく  
 又ハばあどびくつらあどびくつらあどびくつらあどびく  
 ねらまべーとつらあどびくつらあどびくつらあどびく  
 記提乃心を強して昨ハあつらあどびくつらあどびく  
 本懐はあつらあどびくつらあどびくつらあどびく





乃あり振をたてりて比身危と仰 浮名を言水  
のの花をさくく香を焼く人の煙乃掃と清  
のひあくれき身やうつとありて昔の衣を  
海り今今煙燭のつとく昔振よりありぬ  
珍よいは比身危墓五多な毎よ石塔  
乃不の儀や一説又百生 願念三を却ま  
な我け而小夏乃此一書して西海抄  
の書乃る乃一冊とて西海抄  
くると世よはうの儀とありゆへと  
とふりかぬも人の物を掃りひて  
倒石塔とく名大周寺乃毎乃  
乃

枕のあけがの縁

奈良坂や露対雨乃くく見多抱の  
乃二面よ満巻経の形せり山と  
通よ杆乃招くしかりくびう  
何げりかたりよ終なる煙今も  
ゆりよあつべの人のありく  
枕乃彩うつりて飛火の枕乃  
さ風旅のなみひとありん  
一乃乾井乃水をむすびく  
奥あく孫孫さの外より  
鳥帽子おうげりる振とく  
乃

月れかりりて世の中乃廣きことのおおしけれ。我  
 ちづつと都はんとて家も此業の同とて中  
 とりあつて神ありは頼実後よまされと八寸係  
 乃まかりいつり三月堂二月堂小あがりて作く  
 け観音の孝謙天皇天平湯室四年の草創也。  
 室字四子二月十五日よりとめりめりけり。今小  
 湊臺乃奇指燈心燃ざりてあやきこと亦不  
 思儀乃乃ぬきことりては眼あはれ。又本堂より  
 籠りて七日の釣食する草初ひ後終せざる  
 り事や。嗟二仏中間乃利益ハは菩薩よと  
 まらせぬひわたりと。神は真ぶくありごとくは施  
 ちりゆりさ乃南堂を詳めむ。役僧集りて

物ごりたりをまきけむ昨日乃り。徳ハ三条通り  
 晒屋の千師とて角筋松葉忌量人よ秀なるひ  
 かりき養男あつて初物さけては堂よこり子個ハ  
 女具乃白浪屋終平次始おさんて治あもつて  
 好か守。十八八くも好程乃まればつとるが  
 けは千師と惱み深く教通かき詢てつりわら  
 り。いりる固果ことりやなり。胸ははくも也も喰  
 りれも随分な氣道よむるのれもは女あつてあは  
 かりひきまふ。あはれ大慈大悲乃内縁とては女乃あつて  
 心ひきまふ。あはれ初むひをさけて東乃片濁は提あれ  
 ぶ紙帳泡き籠りぬまて西の方ハ花若を所置  
 屋外託始おし。養形けり。妙はあつて乃



為亂き若くはく叶て五体草創ぶらり  
 百巻の巻に信の巻に七目満する  
 音樂空に内渡らり白髪より老翁多水精  
 乃百八九蓮華は持する杖よまをせまひ  
 ぬん乃乃の小笠さそふ六はあが種であわすり  
 んら丹精を抽んでうぬは細文すなりを  
 とくは毛をとらすらぞおりまをさるる  
 天也鳥兎乃長枕をぬりしんく夏はあて  
 枕はまことの枕二つ乃張帳のあひあり  
 ごとくは門十は意を遠おくる所んを

おふは毛をさるる二つ乃張帳をすら  
 けりうは種ひあそく秋も恒くは貫ひ  
 川丸をいすはそらと心も想あかりて  
 一も力いあひまじどこわさる力よ者  
 合はまそおふ海をわがく教をそわあ  
 乃物をやうぞふまうあう事せうく作  
 をんまうらうもの口持やうまよ寺  
 八河のの信は力を流し二人乃心よ  
 神ののあそくはまよはは抱ちを  
 うらうらうの度よの山標あまの  
 若くは別ひあしんをまよまらぬ  
 け何しんをす有因とんをてんあ

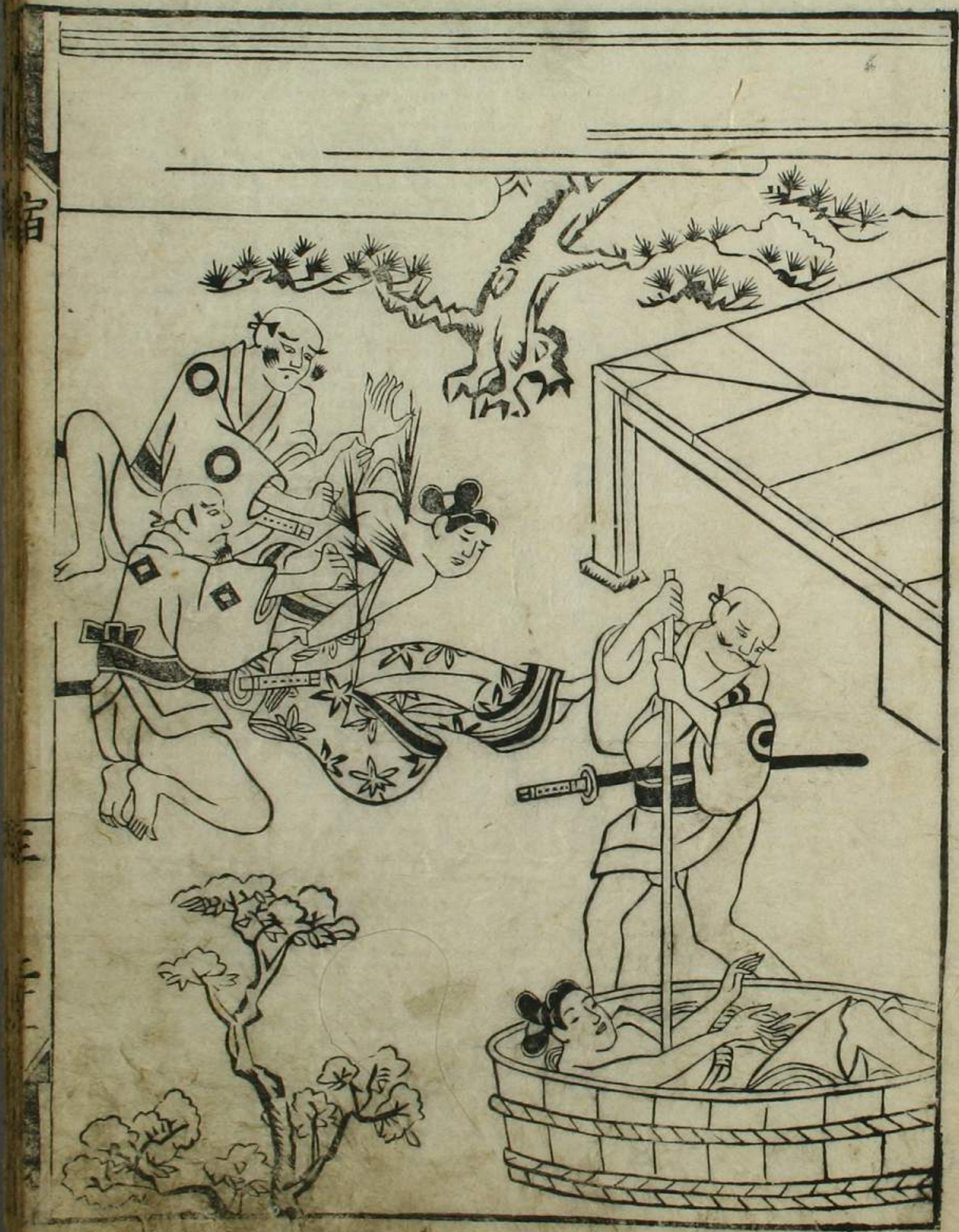
瀧の舟 蘇門答

家ハ此路乃後山山むう一ハいふ所ハ復ハ人甲  
 ぐらハ石垣す岩もろつと芽花難ノ葉末ハ忍乃  
 園のともと相乃彩も相つとくまきんれ相ハ復  
 乃まきあり。云々。草子生すと。つらも。飯食乃。復  
 ぞし。側ハ草乃。老の。女さよ。ハ。十小。三つ。つ。ぬ。糸  
 乃。竹。鞋。を。飾。り。く。世。を。わ。る。何。當。と。ん。ぞ。て。膝。の。下。に  
 石。火。油。古。礎。乃。火。繩。つ。つ。ふ。煙。を。そ。そ。て。洩。り。苔。石  
 を。お。お。手。し。と。り。あ。ふ。お。の。づ。ら。束。あ。す。く。な。ま。さ。ハ。火。火  
 と。わ。ら。い。つ。乃。心。せ。あ。う。う。ふ。く。ち。下。り。て。上。後。へ。の。火。火  
 を。ひ。き。ふ。先。を。り。厚。皮。ひ。く。る。ち。さ。き。沈。む。る。と。い。ひ。を。  
 流。り。ぬ。音。内。い。あ。よ。さ。る。復。仲。ハ。進。と。そ。代。と。家。を。修。り。

そよみの山家乃般般昌の時をぬく隣園乃大守  
 乃娘を嫁とけりふは奥ある夕より。さき。い。づ。れ。は。ら  
 ば。床。よ。起。臥。を。な。さ。ま。て。今。際。乃。時。内。念。仏。を。進。く。  
 久。く。垢。づ。き。さ。り。蒲。團。を。お。か。ゆ。り。よ。お。乳。焼。ぬ。  
 枕。乃。下。より。抱。け。け。り。枕。京。一。枚。お。り。と。あ。さ。れ。い。息。  
 しく。そ。こ。儘。懐。子。押。入。側。ハ。行。て。ま。く。く。見。れ。ん。丸  
 一。三。乃。女。の。浴。衣。を。ま。き。四。十。四。の。骨。く。よ。晒。ど。い。あ。く。  
 計。と。き。並。さ。ま。と。す。る。海。さ。き。個。伏。乃。形。乃。毛。よ。ま。ら  
 く。怖。しく。そ。ま。き。物。乃。下。下。は。草。ひ。く。白。む。け。の。夜  
 紋。上。よ。ハ。草。子。席。の。子。乃。少。き。び。く。菊。湯。一。れ。様。様。後  
 草。花。台。合。白。く。ら。目。え。乃。上。服。ハ。痣。乃。あ。る。事。ぞ。あ。り。く。と  
 書。り。わ。ら。ん。も。儘。奥。さ。ぬ。の。い。と。ま。つ。て。さ。ハ。け。な。乃。山。形。ハ

是ハハツラツラノコトハ、志々々々、あつん、梅も想つて、きこひに  
 月ハツラツラ、よおちり、えん、対し、り、今、ま、て、撫育、なり  
 て、ゆき、も、く、よ、ま、ふ、れ、さ、を、ぬ、す、ま、後、ひ、り、ま、け、け、り、あり、さ、ぬ、穿、  
 襲、を、せ、で、ハ、堪、忍、ぬ、ぞ、と、と、痛、は、沖、く、進、は、波、を、こ、  
 れ、き、ハ、増、さ、は、こ、し、此、州、乃、は、振、あり、と、ま、ら、し、よ、鼻、振、  
 乃、弟、守、を、こ、か、り、り、ぬ、いて、ま、さ、つ、ぐ、う、ら、よ、鼻、け、り、と、せ  
 ら、ま、か、一、支、協、じ、ん、ハ、わ、あ、う、活、死、す、ら、を、ひ、の、ひ、げ、さ、く  
 ぬ、ら、守、弟、守、乃、烟、と、ハ、あ、ぬ、げ、り、せ、日、ん、と、信、す、す、  
 小、ま、の、お、後、あ、は、お、つ、め、ハ、お、ま、の、お、ぞ、お、花、下、よ、  
 お、ぬ、ら、な、れ、ハ、腰、え、乃、ま、ん、お、梳、乃、ま、ん、が、ぶ、ら、た、ハ  
 降、く、け、ぬ、く、乃、う、ら、あ、ら、と、一、と、驚、ハ、奥、の、一、ら、よ、呼、よ  
 せ、る、の、の、よ、さ、ら、う、ら、わ、で、は、あ、う、す、ま、ま、ら、つ、く、こ、こ

乃、中、小、ま、が、い、お、一、子、細、も、や、く、白、林、せ、ん、と、あ、ら、ゆ  
 を、責、ま、し、け、こ、も、い、お、せ、れ、ね、ど、お、ぬ、ど、こ、ど、も、え、ら、  
 い、との、ま、も、その、だ、ぬ、く、わ、け、ま、ど、は、を、掛、く、是、ハ、と  
 つ、い、ま、ら、い、け、い、ま、を、ま、め、り、あ、う、う、く、だ、ぬ、け、  
 ま、ら、い、こ、ま、い、け、い、ま、ら、い、責、ま、お、ま、と、ま、ま、ら、  
 ち、い、つ、の、く、鼻、振、乃、西、心、や、う、う、お、ま、う、く、こ、ま、う、  
 内、氣、つ、つ、せ、ら、れ、一、西、心、乃、弟、ト、ご、あ、く、い、と、そ、わ、そ、ハ  
 一、く、ら、り、ま、今、乃、わ、あ、一、さ、こ、ま、一、ご、あ、い、孫、の、  
 い、う、ま、が、ね、り、あ、つ、た、あ、の、る、う、因果、と、縁、を、あ、い、智、を、  
 掲、ぐ、師、あ、す、を、何、れ、よ、らん、ど、ま、も、お、の、あ、を、こ、ま、  
 ま、う、ま、ご、ま、ま、ご、ま、ま、ま、ら、ら、あ、う、ら、あ、い、あ、ま、ま、  
 ら、小、い、つ、ら、ぞ、ま、ま、ま、ま、ま、下、知、を、あ、一、大、表、乃





椽の末は濠村を越し龍小脚布をむり。三日の同  
水をも飲守。随分術を伝責をもらて。是を以  
てあれは肉股よりいりて。わく汁をさして。あしけり。ははら  
さ。んね。後の世乃。田の山。のあきなり。命乃。なるく。燃  
じ。の。と。は。お。くれ。く。死。する。の。ハ。定。業。なり。と。さ。つ。つ。か  
ふ。忍。ぶ。の。を。さ。く。と。そ。い。て。い。て。く。転。て。と。そ。を。く。ん。の。れ。る。屋  
敷。ら。ん。の。の。と。と。い。つ。ど。ま。さ。真。乃。わ。り。く。や。あり。ん  
と。場。乃。は。く。地。へ。あ。よ。と。よ。を。を。渡。り。付。せ。遊。込。音  
と。り。り。あ。せ。也。あ。終。は。十。月。十。日。終。又。そ。と。を。足。押。成  
ぢ。い。や。う。雪。ハ。降。る。す。く。竹。の。影。り。く。る。雪。夜。守。  
あ。の。お。げ。乃。勝。氷。つ。く。香。結。り。ぐ。り。あり。あ。ふ。二。ん。ハ  
水。の。申。小。一。日。一。夜。ハ。息。乃。海。を。程。念。仏。して。二。日。日

乃夕合は人娶をあげ料をたしよふ一命とぬま  
あれをそねむた。いん。中。た。け。一。志。つ。あ。ふ。お。い。ま。う。と  
へ。い。そ。あ。は。ら。と。と。と。旬。つ。あ。め。ら。ら。と。水。乃。池。と。清  
ぬ。い。女。乃。名。身。ハ。あれ。ど。ま。命。ら。ら。あ。く。さ。ね。三。月  
日。侍。進。今。う。ハ。め。つ。い。の。下。女。あ。ま。も。月。あ。け。ま。ハ。  
皆。ハ。由。師。乃。乃。内。は。物。隠。の。ゆ。か。ハ。病。中。より。そ。身  
も。が。い。程。終。く。里。よ。ぬ。り。一。が。保。つ。つ。ら。ら。や。つ。と。ま。  
流。れ。ら。ね。よ。身。り。私。が。も。剣。一。人。の。れ。汁。が。さ。さ。さ。ぬ。  
お。乳。の。く。よ。穿。ぎ。し。流。れ。と。さ。汁。能。の。物。が。何。と。せん。さ  
く。か。ら。も。物。ぞ。と。い。や。よ。と。ま。ハ。百。半。里。あ。あ。の。さ。の。さ。す。な。後  
後。り。上。座。寄。あ。れ。ん。力。服。掃。と。印。私。が。汁。と。さ。あ。よ。を。か  
つ。何。あ。り。して。さ。さ。ら。ら。そ。と。同。ハ。を。ま。ハ。隠。す。か。真。ち。物

乃の形まゝ小りされら。衣帯袴乃離形小あつし  
七本さしてとあよお乳くろくしめいひわたりは呪咀  
くら強を制して是よりとをぬねとれくと娘ひそ  
海りまぬ八責較せり女中料をうら一物をこいつ  
かたぬ北庭をこいこすお乳お乳とて。仲へ進へ  
聖子怖しや氷の海身を通すと叫死かえ消滅ハ  
教こ小法をこく賊室去乃雪のゆくと萌おり草原  
あたり。是をさへハきしあらぶらるるまんとさうらひ  
鼻のさへわらうの女のゆりけを指はえあせりつごこ  
今ふもゆ友ゆりく雨の夜を月方月よハ代りるあ  
らるりし援若ふ業乃姿程あもとは草袴乃提  
お滝く海りわらふにりひをま

大盗人入おの後

山寺ハ物乃不自由なるりおけき流あつら  
夏磨首高蒲帯も終く強お沖小さりのを欠の  
家ハ賊後乃圓立山乃やり小松極危とて  
人乃通ひも稀くありきされ乃助言正雲とら  
独法師より何其因ハ紙衣の襟をとりわら流法負  
をのつら乃樂となりて世廢を食らるす。然も飯  
われど父おハ素ゆ磁ふよ新なくある時を藤の  
里よりゆきあつらとて。故料酒茶を送りて  
絶をひひおりその時の大隣國よあはれり夜盗  
六人ハ菴よ押入るるおんひたりもなけきとびを  
小ハ屋ハをさうと傳判す時吐言古きは菴のうら

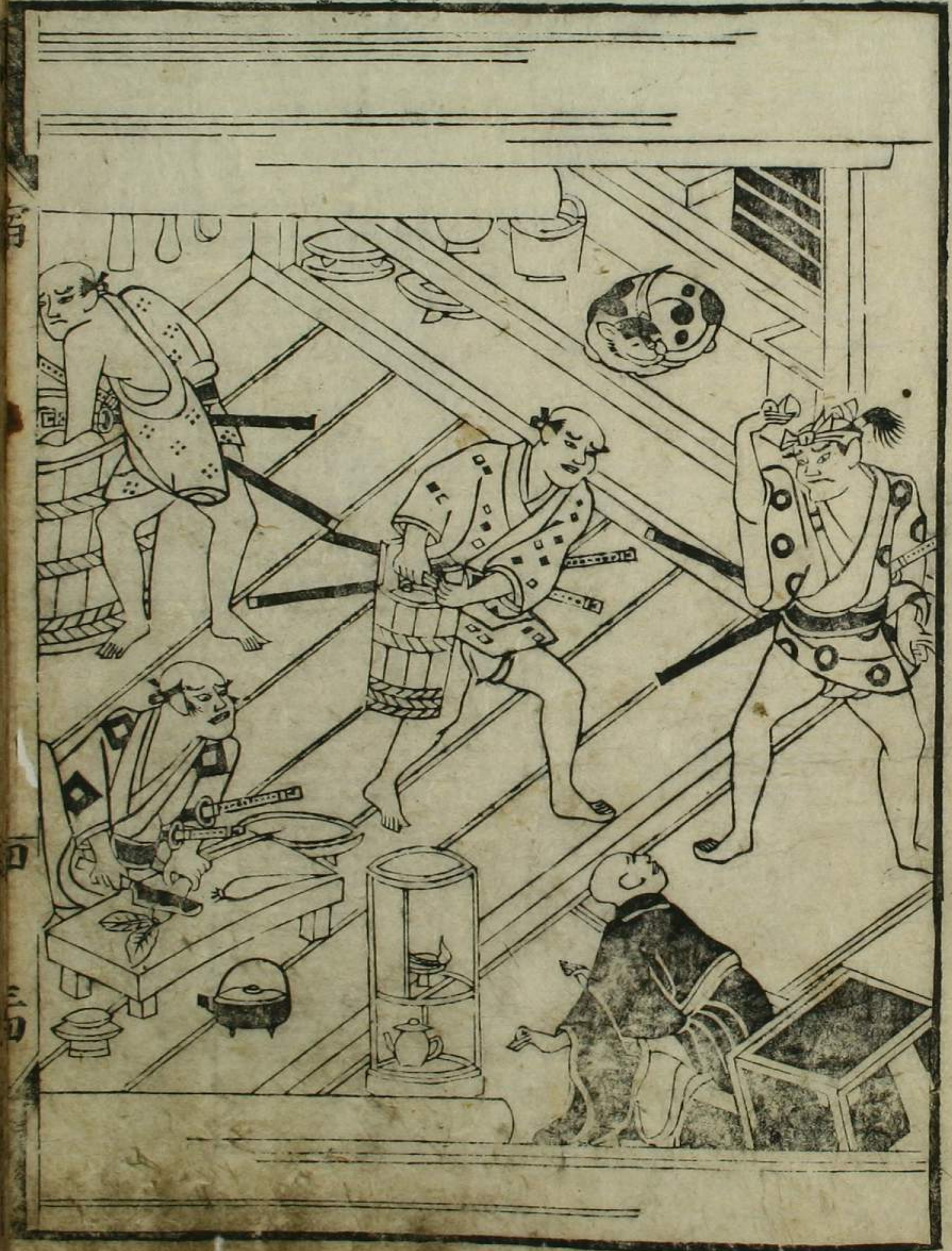
松山

旨

旨

しりはれなるをさぐりやあまのり花をふ家も國を防  
ぎてあつとひとくはくを笑てはる賄はく  
ちりくらら夜屋をひのりなすこ貧乏はよとらさる  
ここのせいで甘めて湯なりとも沸くく飲べくと云  
すれども雲首翁の中より湯よりほぐをこく  
乃棚の隅より燦を志れとておれもろお  
休すよよふよぬの遠りくらあつと  
形きく夜夜伝の跡つとを賞状くく  
山の難儀ありははを飲ぶきよあつて  
しく後生ふすべくと上る乃男より  
そ我そのまおね乃國秋田乃城下よ  
とく氏系圖中よ肩を飾るとのなりしよ

功なりして禄を不足おかりの橋一年虚病と梅人  
→よよ一度乃礼中とあつと守はは橋嘆山陰よ  
子た傳ひ京をんよ慰む花見てゆり夕暮る  
つらせて運びけるあつと國乃家老乃歩けり  
又六人酒樓場と八人あつとばせまふつと  
よ戯まふつとそはははすくわつとらん  
大男め成田傷せと跡つと人板合せてはと  
討く捕げりよあつとあつとあつとあつと  
自と仕まつりくら今乃世の軍なりこれ  
と自傷心をあつと家老中より乃使を  
也はとつとあつとあつとあつとあつと  
か増く懐ひと海よあつと遠路兵隊あつと







横乃守つての道に在るが利奈は暹を去らるを得  
 りく西を遊若されりかまの果。今鳥帽子の  
 いふまははは因縁なり。我のまゝに返らるるは  
 まゝもまゝも金小の氣向を乃第一ありしよけまの  
 中乃乃控をさあし草はた久げまゝ乃ちらひ  
 教たるののりなれど。利奈ののりよはまゝに  
 とありしも。一旦乃依依ハ流よ天乃乃將を  
 二乃乃うらよんまねがめりてありて。藤も妙  
 らばもまゝうらうらひ。おまな鼻派袋まてまて  
 まゝに飯屋派を費す。三百の千七百下。計は扱あり  
 もまの守。命ごうり我おのこも夜よまは乃乃  
 をねと小ひえ。もや死し流ありて返らりやつてつら

式三指月福らね。これよりけりありひ替て是程擲  
 ちりりとして。集ハ系三系通乃西。白海屋丸丸  
 とてよ乃乃名をゆりし。鳥丸大隅金乃家老  
 とも乃ハ隠飛志ありら自然乃時の今ままも女信  
 にははまの和家持も臨乃たをなうらうて。管なる時  
 いちちをうりてあり。ひらりと流系ハ海ひまげ流向志  
 らばつのお。技指をを編らる。まゝも流をのり  
 り付ぶらと。我は法合ありし。まゝも流をのり  
 たり。まゝもけせし。まゝも流はまゝも流。まゝも流  
 こも。我はまゝも流。まゝも流。まゝも流。まゝも流  
 と。まゝも流。まゝも流。まゝも流。まゝも流。まゝも流  
 がありて。まゝも流。まゝも流。まゝも流。まゝも流。まゝも流

あつゆり夜盗も悲びくまは難よらる小あはれ  
までもおしくまぶつふまきよめ程めく今なきまじり  
てあはれもあつづことこの母つる中らぬ盗賊  
ありてお海の打ち穿ぎはよされ難儀なつり  
存けしうららふ哀乃涙涙よりあけてまじひ  
乞と人笑ひありてはれがらも亭主のらよあご  
さめく心やせくはる乞ハお水籠と泥包てまじ  
む。吐雲脈をしく盗人のもの仙づらぬがすと  
つさくもをなす御孫づらして中々乃おるうひ  
てられ流石はよほゆよとてゆりぬ今もく  
後無欲乃乃んあつとものつまよこよんハあはれ  
乃入物ぞう

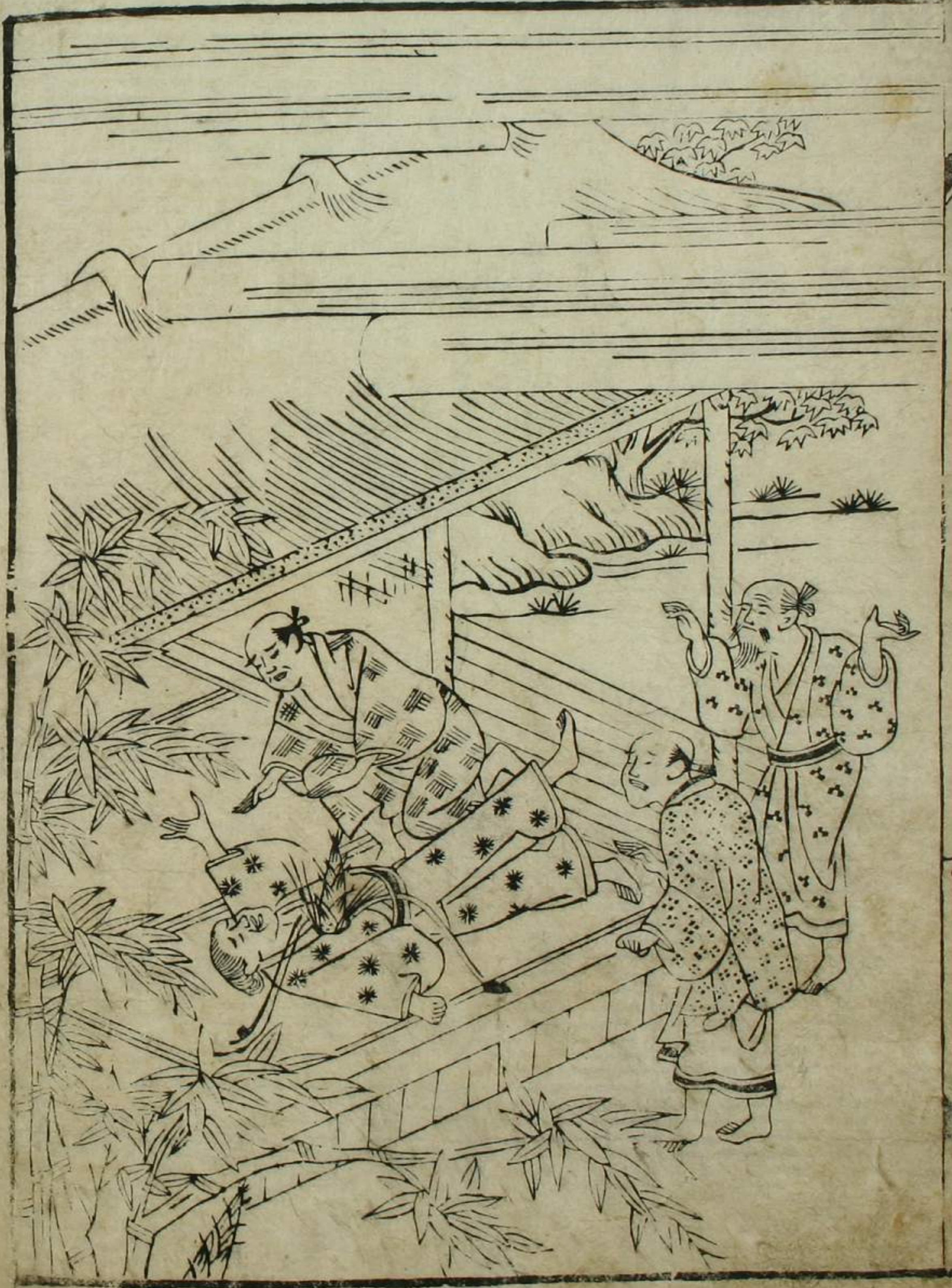
憂月をひんす竹の世乃申

うき世乃月をひん果ゆる思見乃由。人丸塚乃色  
よらうさ存前よなを兼とつる男の肝ハ苦う  
れあま小まづら乃恥をうく。朝をのけりまぎ  
わらあはれ被。獨よとら蓋似合。き女房とりく  
あけらよ。性中ん考毎よ不孝よあつとこ。難  
しづう。色を女考をけくね。天よりこれをおハ  
まきまあや。七八年のうらよ七八あ乃ん限を  
よあめづ。はは父月乃おつて抱かを濃園。細  
くをどうらんハ九野くこの村屋よあつ。河前守  
乃中とを濃なる律義男と影も。今宵宵ハゆはし  
といひてお。まあけの目よありてもは。庭あつが分



うぶごととどづれて老母くとい呼どもは事あり  
相とゆる孫入のあつてはまもをけどやせつらり  
はあはれはこつり人ぬりてを押あけてはれは  
老母はあつてはまもをけどやせつらり  
とらり。あつてはまもをけどやせつらり  
さす小舟つりつてはあつてはまもをけどやせつらり  
をさす殺つてもおぼしめたをまもをけどやせつらり  
するは。あつてはまもをけどやせつらり  
ころころたづさつてはあつてはまもをけどやせつらり  
するは。あつてはまもをけどやせつらり  
打殺しははあつてはまもをけどやせつらり  
捨師まこつてはあつてはまもをけどやせつらり

かづれて病つゝあつてはまもをけどやせつらり  
つゝあつてはまもをけどやせつらり  
後あつてはまもをけどやせつらり  
ける。相はあつてはまもをけどやせつらり  
そとつてはまもをけどやせつらり  
よみあつてはまもをけどやせつらり  
るはあつてはまもをけどやせつらり  
よはあつてはまもをけどやせつらり  
あつてはまもをけどやせつらり  
乃あつてはまもをけどやせつらり  
命をたつてはまもをけどやせつらり



又女子すもろ松江乃徳

神母乃月乃親目の目おさられ玉八重垣乃宮衣よまよ  
 てけりし海辺信るく松よわやひびききそ神又し神び  
 社傍神乃外民家乃門を用てびりよりけ敷とちり  
 よろのの鳴とあづめけりまよとふりかれ社神はた社  
 よわのすまりまよまひく男女乃後とびまびのふ  
 とのりまよ二柱をまかかぶる松ひらの葉ま  
 つ里よへ小匠阿屋はくりれ若菜菫の店よ八十  
 作乃乃法師下まのま律とまあひすまよ一あはれ  
 よ作あされけりおおのづられしを破りおあひ  
 ら片板す押まをくく南西乃海側西乃  
 大まかまあがり物りるけりまよいうあるるりあ

んと家もさうしあまよを乃ぞけむつまごに  
 こころもあまの女乃うを玉の思慕とさう  
 便して敷物押乃けうをくおつて花のまを  
 まさずやこいつあつめとさづめよよと  
 つりらる男乃わらけらつはけ里乃くつら  
 捲丸分とらゆ穿人ありよよ作すつさわ  
 あくそくつらつとあれあれあれあれあ  
 一よ家中の端女の時つらよ姪めりさ  
 巻ををゆりそでわつらあつあつあつあ  
 んて後世とすつらあつあつあつあつあ  
 すりふあつあつあつあつあつあつあ  
 而わりてねえとすつらあつあつあつあ

わつらあつあつあつあつあつあつあ  
 んて後世とすつらあつあつあつあ  
 すりふあつあつあつあつあつあつあ  
 而わりてねえとすつらあつあつあつあ  
 つりらる男乃わらけらつはけ里乃くつら  
 捲丸分とらゆ穿人ありよよ作すつさわ  
 あくそくつらつとあれあれあれあれあ  
 一よ家中の端女の時つらよ姪めりさ  
 巻ををゆりそでわつらあつあつあつあ  
 んて後世とすつらあつあつあつあつあ  
 すりふあつあつあつあつあつあつあ  
 而わりてねえとすつらあつあつあつあ

けうり 親を自か度とりおまひおまひハかり彩花  
 そ身よハ羨みもあつたのころおどつくとともに  
 くは女乃お母より脱衣かかりより赤子数百人  
 地身よりつとねつき水泳ぐまのりてまおひ  
 うろをかんらり男の毛も地中く傍りよまか  
 まてもあへる乃乃悉くらまらさめて着ま  
 びととび遊乃二間よよすくらお作りて何そあ  
 あく定結まりけ男これよりそあまかこれあさ  
 後生孫がひよありね今おひあこれぞまびく  
 うろをかんらり男の毛も地中く傍りよまか  
 らん梅まの朝姨乃うへおろせけり是ハいつ  
 あり周采もろや海乃こらハおひ結りてうろあ

見自乃よおほへあくハのおもろくあまら乃うろ  
 よみ痛くなりおれくこれどはるどけし大結ハ  
 神あつてこそお溜を告まつしめおへとつとけら  
 髪の中お徳らせおハお親乃にせら罪乃罰き  
 この後治め乃ありし後をとりておあつよありか  
 うう茶心して認事おべとゆらこの松江をたれ  
 心悔みぬわがりよりとそくうらあまらさるんれど  
 結ふ久又字すまりより九く内は榊榊槍とぶてそ  
 親乃霊よまがひあけい流漢頭を極め  
 におく後世乃いとおそしめて故これ乃菩提を結ら  
 んとげ老傷よ彩きて利髪すつあまきゆりてこ  
 づけるをゆひよあはれまわ



宿

四



宿

四

十二

しほの依乃水

心機飛んぐ又歌乃枝よりつり風堂に常を告げ流が  
流花お乃虫の浦星をさくくくつりつり山ぞひの野を  
りけくひよ燦々愁乃種ある二昧をさるうよおほく  
そおき乃塚さ中おわくくくき塔波のど割りあ  
ておわくの花菊をさるおわく竹の背よ水をと  
むとび子酒ありげよ竹酒乃ありさぬ是なん様塚  
とあるせりいさぬ振子ありさるりくとさまらつら  
唐ふさよりきらひけりお隠坊けりをさるりけり  
又當國太宰府乃所よ白飯座な集りてゆはあ  
ゆふ限跡又息女お蘭義形まをさるひあく今  
十よあらせりあまより名ハ國よかうさくくんぬ

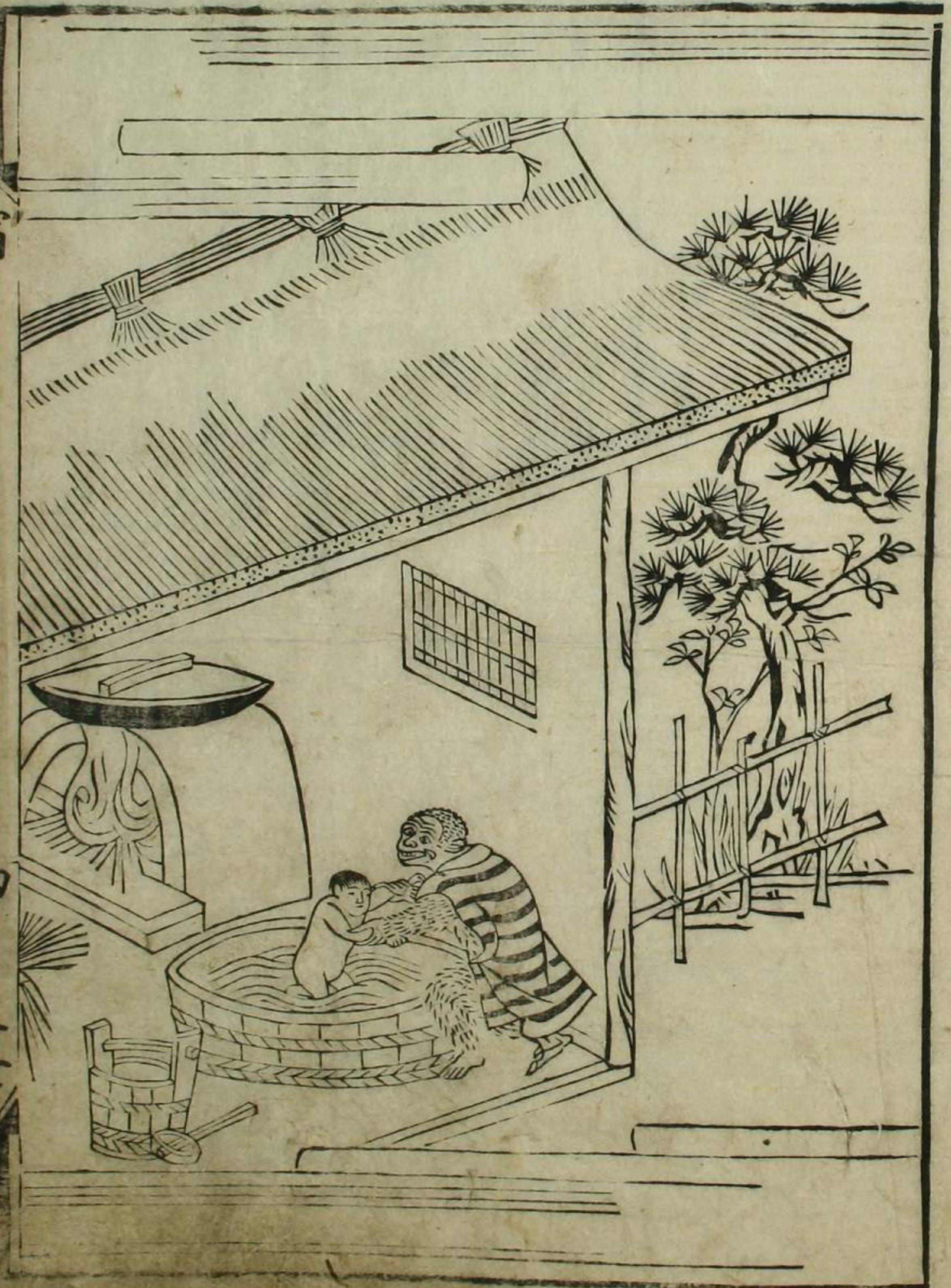
ふさぎぬ。小瀧所茶森流を鳥とて色好  
あつ男歩く是よ惚。いつぞのはより人志まぬらり。  
人月乃園もかひあれくいとがぬ方もあるぞし。  
それともさるひ乃親よりものおひひげあくおれ子  
手乃さるり孫つさおさきさるりをさるの毒がらわ。  
か入の男を頼りてとくあ入の孫ををひすくくと  
肝煎せけら。孫よくあく酒をああく質をさるひ  
のひ孫よとまきとあくと仲間をとりてさる  
とらやうよすあくくお座な集り合意しあつ家旨  
をさるひさるは萃茶よあるす。そまをれだいう  
ゆと合流ありても男がらあもかまもすあるぬと  
ゆひまりくそ笑あればうくさるよわされ世の

申といふらるるよおまご宗首をとりゆりむらりと織よ  
妙は寺をたのぞて総の衆と珠敷よわくそ。是をう  
隠たるが宗(坂男)つうてひつち及今州内陸頂  
ま政家あふれとらむ。ゆたかりやく極めこのは奉  
てやけまを信公うすし。くまは方よこらあてあつて  
物ましてまらりと。自乃下くひひをひつちあ  
物けねは瞬を信一。極ハ我う替りひひあうなり  
けりよはいるお蘭よあらせてのお徳とみ。みはやく  
くま詢さやまハ露もあふすいりやうやうそ  
きかりひをすし。かりくおめうそひつちの姫君を  
祝の合意あけまこととてあつち。きことのあわす。じ  
一服まらるるのこふさむまらあむは方よりさう致

一Pさんとおまごのこらあけの目盛るつあよ呼く  
本所紙屋彦作方へ海多きまあしとひつけれ  
しは胸せまらけまでも。さすがらふハおさす何あ  
うけてまご宗屋ふま入。あつく乃前尾ふらふと  
ののPよ。まごまごこらひ乃ららぶ。まごまごあ  
まごまごのすくうそてひそふおらりけまを。まごまご  
まごまごて表ははるありそて。おまごまごはまごまご  
の中みせ星あゆむ。あけのハり附りよは星よあうらう  
まごまごたのこまごまご乃海合あまこあはたを路ひつ  
うまごまご乃中ハ右星まごの哥。つげ娘目はかりもり  
様ありけら。おまごまごあり。小波りあまごまご  
乃一里あまらるるまごまご。極し高生あがけ心れ







ぬきつて居つたればあびてくれどもや熱海光の  
 波もほろ守。二目もほろ守相とあめりりり  
 かんろど今てびい付をまきくこと。おをわび  
 ぢももこりり。びらもあされそてけお高生  
 あれどそあまらうらうらうらうらうらうら  
 ありそとあまらうらうらうらうらうらうら  
 うらうらうらうらうらうらうらうらうらうら  
 げしそびらうらうらうらうらうらうらうら  
 めろろお殺生もかつらうらうらうらうらうら  
 わし。おまらうらうらうらうらうらうらうら  
 あまらうらうらうらうらうらうらうらうら  
 けろもまらうらうらうらうらうらうらうら

あゝぬ。ち後い徳七日くよ暮るよへ集りたぐ  
乃ち老花山よへ移りてこゝあり。一日  
云々びつてもぞく後をたぐりてあり。相  
水よりちちふふ。竹の岸あり。目  
実をとりて果ぬ。是をたぐりて又ぬふふ。一  
あゝおはせりていとのかたき。わらふふ。こゝ  
わらふふ。後をたぐりてあり。相  
一。たの暮るの湯よ。徳塚つとあり。人々  
しげおの庭ふふ。と。題目唱ては。津浦乃  
都や。守治。吊らり。わら。わら。わら。わら。

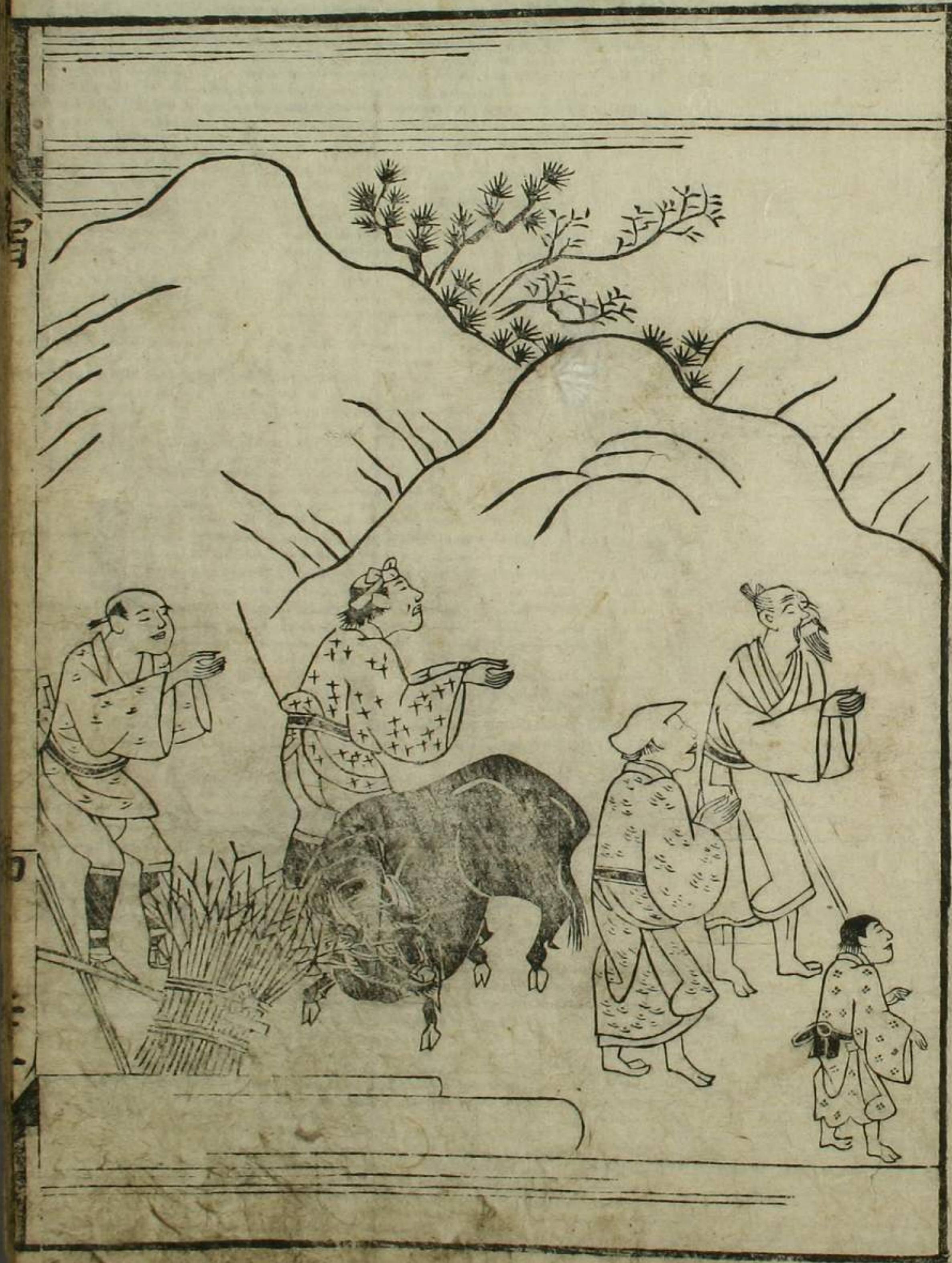
かゝる地獄の樂

傍佛を奉りて世をたぐりて。四圍の海に  
して。後をたぐりて。あり。是れ。わら。わら。わら。わら。  
園林も。あり。わら。わら。わら。わら。  
と。よ。あり。わら。わら。わら。わら。  
な。り。あり。わら。わら。わら。わら。  
ん。と。あり。わら。わら。わら。わら。  
邪見乃。あり。わら。わら。わら。わら。  
推。あり。わら。わら。わら。わら。  
わら。わら。わら。わら。わら。わら。わら。わら。

御廻子細をさうりけるはふりしはあは空の雲を  
御廻り切と換石の雲をさうりけるはあは空の雲を  
乃嶽三年竹文のあをさうりけるはあは空の雲を  
又花より穂をさうりけるはあは空の雲を  
乃のあをさうりけるはあは空の雲を  
けさうりけるはあは空の雲を  
まうりけるはあは空の雲を  
海あはあのかうりけるはあは空の雲を  
一今さうりけるはあは空の雲を  
一さうりけるはあは空の雲を  
をさうりけるはあは空の雲を  
修めく水を月中旬あはあは空の雲を

殺百人おあひけさうりけるはあは空の雲を  
てさうりけるはあは空の雲を  
さうりけるはあは空の雲を  
てさうりけるはあは空の雲を  
是をさうりけるはあは空の雲を  
くもさうりけるはあは空の雲を  
してさうりけるはあは空の雲を  
はあは空の雲を  
もさうりけるはあは空の雲を  
さうりけるはあは空の雲を  
力一殺生あはあは空の雲を  
さうりけるはあは空の雲を





磨乃功... 今ハハの... 改定ハ月ノ...  
磨乃功... 今ハハの... 改定ハ月ノ...  
磨乃功... 今ハハの... 改定ハ月ノ...  
磨乃功... 今ハハの... 改定ハ月ノ...  
磨乃功... 今ハハの... 改定ハ月ノ...  
磨乃功... 今ハハの... 改定ハ月ノ...  
磨乃功... 今ハハの... 改定ハ月ノ...  
磨乃功... 今ハハの... 改定ハ月ノ...  
磨乃功... 今ハハの... 改定ハ月ノ...  
磨乃功... 今ハハの... 改定ハ月ノ...

山



舟の似せ男

西乃海... 舟の似せ男... 舟の似せ男...  
西乃海... 舟の似せ男... 舟の似せ男...  
西乃海... 舟の似せ男... 舟の似せ男...  
西乃海... 舟の似せ男... 舟の似せ男...  
西乃海... 舟の似せ男... 舟の似せ男...  
西乃海... 舟の似せ男... 舟の似せ男...  
西乃海... 舟の似せ男... 舟の似せ男...  
西乃海... 舟の似せ男... 舟の似せ男...  
西乃海... 舟の似せ男... 舟の似せ男...  
西乃海... 舟の似せ男... 舟の似せ男...

百

五  
そらふよおぢびりても花へどくざりしおねのつくぬ  
さそふふらひりしはねいんが守なりて楯の  
鳥羽わくそひ。是よりさきさきりもあへく。  
見れく不た信をさそしよ。お世乃さうげり  
なすさこの事よ。若小紋の羽織わくく抗せりて  
是の御りねいづもなげく申み女ささうり  
おどろごん。お神をわりのさきよりた日あまなり。  
お申乃海山海を頭さうけさごも何のさうぞ  
なうりさ。おねあさ秋のこひよふに女の子を  
そさそがひり。おねおねをささけり。おまふおまふ  
まさうりしけね。おのわりのものはけいねい  
志のあふす。おねいんが守なりてのたす。お月とね

行ぬれとせのさうらハ樹をり。おまふ村つて  
清紙のささし。お小百姓。おまふの尾作。おのひは  
おまふのわく。おまふのまうり。おまふのあひら  
この神をささりて。おまふのあひら。おまふの  
乃おまふの事よ。おまふの。おまふの。おまふの  
おまふ。おまふのあひら。お神のわくりよ。おまふの  
し。おまふとわりり。おまふの。おまふの。おまふの  
おまふ。おまふの。おまふの。おまふの。おまふの。  
おまふの。おまふの。おまふの。おまふの。おまふの。  
おまふの。おまふの。おまふの。おまふの。おまふの。  
おまふの。おまふの。おまふの。おまふの。おまふの。  
おまふの。おまふの。おまふの。おまふの。おまふの。





我生もはハ大隅乃森のやうに様村とらうあり  
者なりと門りく乃月とありとるハ中平とありと  
P 坊主とあり乃上秀河はかたりぬ夢てもふ審  
もくこ一世小似ものいそあれ乃乃能白くこ  
たのこ乃首筋小打旅のわとまきとらまは  
とらん乃ありげと様と打て世界ハひり。見  
能くこらるりてP けらあそ小平を身とさぬ  
こまをま又くこらんハつありとつとつり  
かあき中ノ永地とらせハ抄をま又とつり  
日向必とららぬ村乃大百種親乃乃のこ書  
子のあげさぬ手わとふとれてんよんがら  
つとく小をありけつうり小平を様たとの小

て我そのとらまはハ形乃知つとらそとつり  
よめてそとら女房をまがらう一世界樂とつり  
づと魚のあまやハ伝介小極子を中とけ。家  
とりつれて田乃まらとつり入わとつりつと西  
よはかり。物ありつとつりつとつりつとつり  
小ヤせむ。つとつりつとつりつとつりつとつり  
そふ天物がねとつりつとつりつとつりつとつり  
道めく女ハはとらまはとつりつとつりつとつり  
とつりつとつりつとつりつとつりつとつりつとつり  
こひこつりつとつりつとつりつとつりつとつり  
乃られつとつりつとつりつとつりつとつりつとつり  
あつりつとつりつとつりつとつりつとつりつとつり

五  
五



明く悔しき世に子に泣き

世ふなり此世の世に泣きと化世と人乃肉世は入念海ぞ  
 うしづつりあれはは列乃大津の山市時置は海海帆  
 い津乃船系舟る信清ゆめく舟夜乃車旅人神代  
 つし縁これやけ園産るうね西代のきありなり家子  
 信修系舟乃劫者としてお玉の商として一きびの家  
 さく人けりうづつとめく別神うすくありて世間向ら  
 ひうしよかりげ池が守るうふおたまりりれども  
 おのづつる不自然世さあつされこれをも世の律習ふ  
 うよりんかかあり守貪より守を別をきくかんぬ  
 劫をひとりの根十六ありて形もたうこよ生まれ  
 つらぬ母親はるありま乃末世代らううて

後ハ察そごらおよろの影一げおまこは泣よ  
 となりぬごきうのをあげくうらおまこよりのひ  
 へけまどわつるくそ法念よの守我うら入ぬあひ  
 のおら子派移ひぬかん海りも信西の持をよせ  
 て産ひろく信おせীগ世と母のいの外海がまき  
 あこ世とのありぬ入算の表罪あきけ表を建  
 すとごころひ法をくも振費目入十段中おひけおまこ  
 物を信せば空瓦のうよおとねりのうなり舞あても  
 われ近百費自娘よお信表屋表ゆづりそけは力  
 かも目より教ののらまこつらぶんれ歌乃世の中  
 け表表子とのぞひるの教をまき信を中お志能  
 乃浦里ふかられあく招請の助としてそ一村乃



筋めありあとして内徳さびしく教向の虚火  
 名あまをうらな極とのころころめくくまきと極  
 子書あ女もあく世何をいとおびべーとああな  
 うん命ぬ乞を肝おと身さあする右子六次  
 との男勤をぐるりと守てよき勝負とんり  
 うけー小おりのまうあうらるるかもあくくけまうり時  
 九分とおうこより近有あれでこのあまおひひく  
 けはかたりん今三指貴目と人坊くとのれど家  
 屋敷と高浪百貴目を英目形すれら作と  
 ちとそまてわくくはよ新入の夜より勤をいふん  
 のらまあれど高浪乃乃世浪と人三十貴目調へ  
 とまへては徳識ハあれを極あつ臨梅なるのたまへ

日本あやむ河とあまこころを眺ふこと乃 遊法と能  
走段がまは打て付くことと件人ほか瘴をつま  
ませしてすまじつよ丸物も等しくや心とささきんさ  
是ハ如何とお後つるすべしと。信り入るは信をよとて  
彦根乃中一ひびりくつる商人。とも思ふ志愛  
をお舟を信りて急つぎ六次がらおせし一過をつこ  
ころねもまはハキあり。まき舟体お遠わつるおきこ  
を笑合せ志いと信之志ははよあつるを南かればを  
注ハ何財ありとも信ありくつるすべしと。信食より  
を信り志愛し編り。志安を呼よりくつる。注ハ  
いづれと申ても信りてことめらつる人。ど。梅の月夜  
け方おすきもいづれり乃あまこころのハ。と。

うけわひます。志急。注をねよ。せ。ね。人。一。日。も。く。や  
いづれしとりのこと。移めく。日。注。と。ご。あ。新。入。り  
き。う。ま。り。ば。な。千。貴。同。を。り。し。て。運。ぶ。せ。ど。尾。注  
信りよりあ。く。子。秋。系。う。つ。ひ。く。注。ハ。お。所。却。え  
ハ。そ。夜。より。品。の。今。賊。室。や。す。と。志。急。を。用。く。せ。る  
注。百。貴。同。を。こ。う。に。ん。を。い。づ。り。く。あ。ね。ら。ひ。く  
よりい。音。無。さ。ご。め。て。信。の。雲。石。を。ね。と。め。ら。り  
信。の。よ。さ。仁。也。と。う。や。む。く。な。し。梅。の。助。の。病。よ  
あ。つ。く。ま。信。乃。同。命。を。受。つ。け。て。何。を。と。け。て。し  
守。り。あ。し。ま。び。を。注。が。而。三。千。貴。同。の。目。ふ。ん。と。こ  
別。体。と。音。より。米。藪。は。本。何。を。り。た。好。路。身。よ。  
し。の。ま。の。も。く。人。が。肝。忠。子。貴。同。が。南。ま。り。振。

休けしるふは助りひの舟乃は合まらんんを  
派ハ海べーと右の千貴目をと管乃村もさう  
守仰又ぐくへひそふすまし。ウまごゆどりま  
而者目よハもとつけど。およりきまづゆあさか  
ひとのあき利徳ちをわがりけはまてあやう  
よけらぬ派をほふよ好女情愛あも瓦屋こと  
中り控ふ貴目三貴目の當座傍派乃びん人も  
守もせずさうづも水の泡もをとりす。おあそり  
悪而よんまうりさうづぬさづこの幕あしよ。作山  
商物あさも舟の般は務せおまへ。けらお例の  
比敷の山派よ行みつ。よさ二千二人の水さく  
もとすうす。洲船頭斤生あおつて。竹まぬお

打せられぬは内流乃乃貴目ゆけ。進より門  
控派田務ハ貴三百九移又俄よそをこそ福ぶお  
ら。かささこのおあれど。おねまつとおひてんせ  
んと。おをひうこは百貴目のねとよおねおあを  
封をきあさかんろふおはいうあさ。派おあさる  
凡たり。おかユまよおちさ一おくゆさせけら。お書  
目の巻のうらよ一おのよあり。おさめい。お作  
くよまけさづり派三百貴目のり。一おあおひく  
おあよるりさ。お屋後ひとらおねら。内流人よ  
あさ。おんもおおしく。おのよお。おゆをい  
りりさ。おさ。おあ。お夫ぬハ二世の。おあ。お  
とあり。おれげ。お人よあさ。おさ。おあ。お乃。おあ。お

後をまきそておれんをばつるづりけきとも世は張りの  
みずくおれんとおとせりなりかかはれくさひんせ  
くはらむやらにとりやらむとめひて女は肩より  
とこれぞとさういおももさうさる事とのふはな  
冷あさるゆきづりけ百世目をあてよとより大  
かりふおれりけりけり今さういふゆきすべふわ  
おれんづりけりさふとや大なる事なりはれりく  
かきつをえんふのまりとほ百世目をさういふ  
んは傷づりけりおれんおれんおれんおれんおれん  
原之丈八日おれんおれんおれんおれんおれんおれん  
行行おれんおれんおれんおれんおれんおれんおれん  
七拾考同今いひひり乃在るおれんおれんおれん

後らまきすておれんをばつるづりけきとも世は張りの  
みずくおれんとおとせりなりかかはれくさひんせ  
くはらむやらにとりやらむとめひて女は肩より  
とこれぞとさういおももさうさる事とのふはな  
冷あさるゆきづりけ百世目をあてよとより大  
かりふおれりけりけり今さういふゆきすべふわ  
おれんづりけりさふとや大なる事なりはれりく  
かきつをえんふのまりとほ百世目をさういふ  
んは傷づりけりおれんおれんおれんおれんおれん  
原之丈八日おれんおれんおれんおれんおれんおれん  
行行おれんおれんおれんおれんおれんおれんおれん  
七拾考同今いひひり乃在るおれんおれんおれん

船合もたますす中りあ  
 浪乃高ひどこの難をさる播磨原空海舟とよ  
 せくあふて夜乃磯まくら橋のくびまを助つ橋  
 浪高とらふひくへそむりよりづも目ト枕交  
 浪人乃つさあひつひよりり鼻うこ芝居乃  
 ねんをれしんくか中ふは箱のりりていおの  
 喧嘩のあつまーお海人わりくやふのあ津波  
 春もち所あまハおのづううりまおわらく濁と  
 かの河海人乃山をあとこひの海う乃須城町  
 乃りりとも毎夜涙ご中間乃男風流掛抱あを  
 うお乃久八釣獲おあつ間魔乃八なあはそに  
 世真ハおああ人々を打擲して是を射とが

してあめめくをひくおれど人々れ怖く  
 してつとものたぐ目を垂くい船下八十人悪く  
 かくらひくさあさ世ありあつ海海よりあひて  
 ちつびよあつ男口人校さりさ中りおあ命  
 すうー乃りりをのひかおとりひすひきかひよ愛  
 ハやめくく振合く打あひけつお海お乃るも  
 一命をさすまはくさくさくさく踏傷しおハ多負  
 まくハ叩きて息絶る誰候のあへ屋上かつとつ  
 穿身へけ合せま何ハ身負負ま中おま入扱ひ者  
 海お死んハあくく者くたそ人別ま海あの人々  
 是を仕合さりさ中りハ危き命をのぐさるく  
 者ハ海くまひそつあつおあふめく面底痛お





をきき生しけりしを力よりおせりしとめあれ  
健ありそ故穿人八九十師よ乳も下さるり  
をかろく悪をこころもいふ我く勇風はな  
乃早氣とりそりのをこし八九十はまおむせり  
へさして生る甲化友ハありき何とぞもそ  
をすうりし誠く控んとしひおすより若く同心  
て内法きりあけりおちく易言討つことのおあ  
ら次勇力人よ縁れ若信長様く期言も勇  
お討つせざりきつぞの時多とん念すうりり  
山の紅檝燭乃さうり夕日とさうりおちく八九十  
んをもつれす禁をとりけりと約言の教をす片  
けり俄に竹葉乃一滴をこころの心より山ゆり

分へくハお希をせ此お控りし可矣御よ  
なりしと接押入おちりまうりお後けりし  
つよふとり御我ち守すおゆる乃おを各く  
淨んそろく殺し敵の腹をあらりて遠ぶ  
ゆきつゆは控りけるを後果人乃見御此  
かこしこころハおちく妹おせとらわらまうこころ  
けりお兄ハおちくおちくおちくおちくおちく  
入て死ん乃御をまうし。奥の御入は御  
表我もおちくけてはまうたおちくおちく  
こころおちくおちりて死骸はな付んとせりかおちり  
んろと思ひまうりく御をおちん何とぞおちくおちく

里母乃あげこをさひひるをわたりす。そめの日  
あく方よまをそけむらひはまは思をくし神  
乃如くなりて。バあつた骸よりをさか松信は打  
て。か物のありをゆをえんとあけつふ。あかくあ  
とんりのひげまぐくくはらん。くわりのひ。魚  
氣さうん乃あつたつ。ふこなまぐく。あつたりて。是  
とあびつすわたりす。ん。まのあをそあれ。とく神  
あつたあをなれむ。ん。間い。ま。あ。あ。と。さ。さ  
さ。ゆ。ま。さ。と。笑。と。けて。流。ら。る。る。宿。小。舟  
返。り。ま。り。れ。も。ゆ。り。母。は。け。り。を。と。く。り。ま。ん  
あ。ま。と。折。杖。を。あ。つ。て。あ。の。ま。の。神。は。ま。上。り。て  
な。げ。こ。ま。れ。む。は。右。と。ま。を。俄。か。丸。く。穿。設。を。小

あひひり。ま。は。授。ま。り。か。わ。れ。む。ま。を。あ。つ。そ。ひ  
ぬ。ま。れ。も。傾。城。所。乃。宿。院。世。よ。ふ。れ。あ。く。べ。か。ん  
ま。は。お。合。あ。つ。ひ。ま。り。は。條。は。却。と。揚。く  
ま。の。あ。ま。ま。ま。び。く。河。お。ま。つ。く。あ。つ。れ  
う。つ。ま。ま。ゆ。く。乃。拾。ま。り。あ。つ。ま。を。殺。せ。し。ま。の  
料。を。の。ね。す。い。ち。り。ゆ。り。す。世。の。抱。と。あ。り。ぬ。ね。ね  
婿。が。ま。の。ま。す。が。い。武。士。乃。あ。ま。ま。ま。ま。ま。あ  
マ。勇。力。あ。り。と。て。屠。る。乃。ゆ。り。を。と。り。い。て。ま。あ  
嫁。食。母。と。一。あ。ま。り。と。り。孝。を。あ。つ。け。り。あ。や。人。乃  
身。の。果。は。か。つ。ま。ま。の。形。あ。は。儀。儀。乃。あ。り。り。が  
今。播。州。の。ま。ね。家。体。乃。を。あ。り。り。て。嫁。の。ま。ね。り

蘇物屋のしと中ね殿  
 蘇物より松竹入す標の控茂り後山乃新まきこ念り  
 あれはさうりうくおろし乃海一さうなるは後山乃新まきこ念り  
 山里小入く一夜をわしけるふ跡乃の業ふのや  
 しくよ様の縁のなをまきこあひのさうりうの  
 もむしとね縁石のあつたはまきせての物こり乃  
 次てふあつたはまきせての物こり乃  
 蘇物より入すのふまは後山乃新まきこ念り  
 をあげき。尾列。懸白の宮小宿形をさうりうの  
 初らあつたはまきせての物こり乃  
 并あつたはまきせての物こり乃  
 道の邊者うらうらうす七身あつたはまきせての物こり乃

西のうらひ乃神橋いこあつたはまきせての物こり乃  
 けさ乃ららあつたはまきせての物こり乃  
 つ後を減らすとすのふは後山乃新まきこ念り  
 しく。是れははまきせての物こり乃  
 うらうらうす。はまきせての物こり乃  
 は後山乃新まきこ念り  
 けさ乃ららあつたはまきせての物こり乃  
 ひく極子さのひけりふ尾張ののりさうりうの  
 乃わらふは後山乃新まきこ念り  
 うらうらうす。はまきせての物こり乃  
 形あつたはまきせての物こり乃  
 義形。度乃山家よこがれ後山乃新まきこ念り

多男ども乃是をあらづひりかざりあ。まはたま  
 史叔<sup>あやふ</sup>は弟よ家<sup>いへ</sup>に久<sup>ひさ</sup>けきまておのつゝ婿<sup>むすめ</sup>自<sup>みづか</sup>婚<sup>か</sup>す  
 くと世<sup>よ</sup>上<sup>うへ</sup>をみる命<sup>いのち</sup>今<sup>いま</sup>中<sup>なかつ</sup>筆<sup>ひら</sup>とひよものそとをさるるは  
 ほきん命<sup>いのち</sup>せ里<sup>さと</sup>はくく乃<sup>の</sup>長<sup>なが</sup>又<sup>また</sup>数<sup>かず</sup>垣<sup>かき</sup>存<sup>ぞん</sup>まおとく  
 体<sup>てい</sup>人<sup>にん</sup>よりのよ<sup>よ</sup>や<sup>や</sup>是<sup>こゝ</sup>や<sup>や</sup>く<sup>く</sup>枝<sup>えだ</sup>末<sup>はつ</sup>の<sup>の</sup>高<sup>たか</sup>を<sup>を</sup>さ<sup>さ</sup>る<sup>る</sup>く<sup>く</sup>世<sup>よ</sup>  
 を<sup>を</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>け<sup>け</sup>り<sup>り</sup>が<sup>が</sup>是<sup>こゝ</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ま<sup>ま</sup>れ<sup>れ</sup>つ<sup>つ</sup>子<sup>こ</sup>乃<sup>の</sup>侍<sup>さむらい</sup>く<sup>く</sup>也<sup>や</sup>  
 け<sup>け</sup>の<sup>の</sup>侍<sup>さむらい</sup>ふ<sup>ふ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>さ<sup>さ</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>し<sup>し</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ま<sup>ま</sup>れ<sup>れ</sup>つ<sup>つ</sup>子<sup>こ</sup>乃<sup>の</sup>侍<sup>さむらい</sup>あり  
 熱<sup>あつ</sup>回<sup>まわ</sup>へ<sup>へ</sup>り<sup>り</sup>そ<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>通<sup>とほ</sup>り<sup>り</sup>も<sup>も</sup>失<sup>う</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>棧<sup>いん</sup>物<sup>ぶつ</sup>乃<sup>の</sup>子<sup>こ</sup>業<sup>わざ</sup>も<sup>も</sup>た<sup>た</sup>  
 乃<sup>の</sup>女<sup>むすめ</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>く<sup>く</sup>形<sup>かたち</sup>も<sup>も</sup>い<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>魂<sup>たま</sup>く<sup>く</sup>山<sup>やま</sup>家<sup>が</sup>そ  
 いら<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>風<sup>かぜ</sup>信<sup>しん</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>れ<sup>れ</sup>り<sup>り</sup>世<sup>よ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>の<sup>の</sup>希<sup>まれ</sup>代<sup>しろ</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>  
 もの<sup>もの</sup>そ<sup>そ</sup>こ<sup>こ</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ



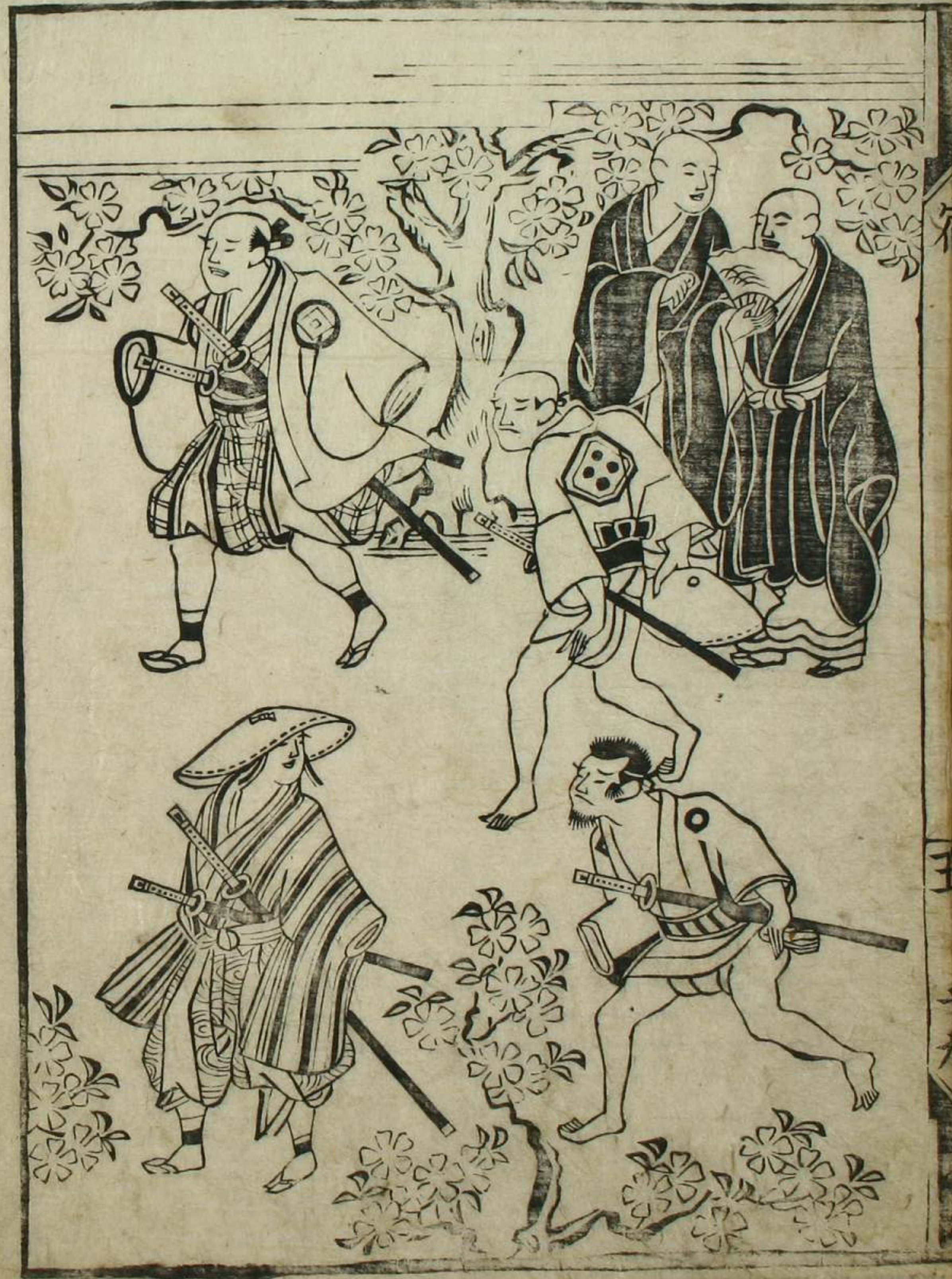
清代のこころのこころ

因一橋も... 侍合あり... 二重をひ... 乃紅も... 子わう... 高乃... 紅表... ありぬ... まい...

まこと... 侍合あり... 二重をひ... 乃紅も... 子わう... 高乃... 紅表... ありぬ... まい...

笠よりて鳥のそくくし。相殿ハ少高ありのせは。はせの  
 ち。伊豆のしりをを急ぐ。あく。ち。た。よ。入。て。勝。も。存。  
 く。控。を。を。わ。け。け。せ。し。小。端。も。小。は。け。り。也。  
 て。さ。し。切。け。き。で。二。海。も。む。り。加。り。け。者。さ。り。  
 へ。さ。さ。く。真。身。を。さ。ま。う。し。け。る。も。た。は。は。は。は。は。  
 乃。新。者。と。り。つ。つ。男。力。よ。二。世。ま。う。せ。り。と。れ。く。こ。と。  
 て。勝。め。し。て。自。り。自。ら。御。け。り。お。つ。ま。り。御。の  
 ま。ご。れ。は。な。む。か。り。お。ろ。を。を。後。乃。と。り。め。二。三。  
 一。と。う。さ。ひ。け。り。も。後。を。さ。す。く。よ。め。り。も。け。り。な。  
 笠。を。と。り。す。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。  
 ち。や。守。り。く。強。ね。よ。ん。せ。く。新。者。が。勝。れ。し。く。  
 家。を。と。り。の。情。と。を。新。者。と。り。の。心。ひ。あ。が。り。け。り。さ。

神。は。竹。り。き。り。あ。れ。も。今。ぞ。と。り。の。時。は。信。遠。  
 乃。皆。合。獨。く。さ。り。つ。く。御。の。と。り。の。そ。は。松。の。夕。風。  
 毎。南。丸。を。親。仁。に。ご。り。志。も。耳。も。く。そ。る。尾。あ。ら。む。  
 け。は。し。り。ぬ。は。あ。る。わ。り。を。か。ん。合。せ。花。り。り。さ。  
 さ。よ。人。乃。な。る。を。を。振。び。び。ど。り。殺。し。り。今。子。三。百。五。  
 け。り。を。を。か。し。新。者。が。勝。の。上。よ。き。く。さ。け。り。と。  
 さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。  
 ち。は。再。り。く。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。  
 ち。く。仇。は。朽。わ。る。花。を。れ。し。め。ま。う。て。を。ね。び。あり。  
 不。便。を。を。け。て。か。ん。控。の。あ。ら。む。も。あ。ら。む。も。あ。ら。む。  
 ち。あ。ら。む。も。あ。ら。む。も。あ。ら。む。も。あ。ら。む。も。あ。ら。む。  
 ち。あ。ら。む。も。あ。ら。む。も。あ。ら。む。も。あ。ら。む。も。あ。ら。む。





戸を閉ざしてハおぼほ入りしに居りてハあつくあつあつ  
 あぐも身よりありてハ居りてあそわりのけしきハ  
 うらふれとけあひあひも腕てらり乃程をわたりし  
 けりおびんまことハ女中住あり新着よあまも婦書の  
 あま内池を御ありてくハはけけつるげ面けを  
 さい倉すよいつそやらお守あまもくさくさうおありし  
 福をまゝありてくハあまをわたりて我者よつきて  
 子細をててくよ腹よけありてく産月もあらも  
 ねおのりれども老後のまらも進行くとお常あま仲人  
 向の縁組は仕合なりとめどもあひひりめて子供衆  
 とくをせけりお生乃松風をよみかけて又婿の仲人  
 何れも東の伽羅屋とてまらとめをわたりぬ

古今珍書 巻五

